

ハナグスク

－波上宮御復興造営事業に係る埋蔵文化財緊急発掘調査－

1999年3月

那覇市教育委員会



巻首図版 遺跡一帯の空中写真

序

この報告書は、波上宮拝殿建設工事に伴う埋蔵文化財ハナグスクの緊急発掘調査の成果を記録したものであります。

遺跡の殆どは後世、特に戦後の改変を受けており、遺構については残念ながら明確なものは確認されませんでした。それでも遺物については中国・東南アジア・日本本土など各地の資料が出土しており、当時のハナグスクの盛んな様子が窺えます。発掘調査から整理報告に至るまで波上宮のご理解とご協力を賜りましたことに対して心より感謝の意を表します。

末尾になりましたが、この報告書が文化財愛護思想の高揚、諸開発の協議調整ならびに学術研究等、多方面で活用されることを期待するものであります。

1999年3月

那覇市教育委員会
教育長 渡久地 政吉

例　　言

1. 本書は、那覇市教育委員会が宗教法人波上宮の委託を受けて、平成5年に実施した「ハナグスク緊急発掘調査」の成果をまとめたものである。

2. 本報告書の執筆・編集は玉城があたった。

3. 資料整理は下記のメンバーで行った。

実　　測：富山園美　金城礼子　名嘉真由美　澤嶽永子　城間美登里　仲松勝枝

　　国吉成子　喜屋武民子

分類・集計：富山園美　金城礼子　名嘉真由美　澤嶽永子　城間美登里　仲松勝枝

　　国吉成子　喜屋武民子　宮城かのこ

ト　　レ　　ス：富山園美　金城礼子　澤嶽永子　城間美登里　喜屋武民子　国吉成子

拓　　本：名嘉真由美　澤嶽永子　国吉成子

復　　元：城間美登里　喜屋武民子　国吉成子　澤嶽永子

表　・　図：金城礼子

写真撮影・現像・焼付・図版：栗山初美　座安知子　富山維佐子　城間美登里　喜屋武民子

　　知念美知子　国吉美奈子　勝連紋子　上原章子　砂川貴子

　　富島靖子　金城礼子　山下真利子

4. 遺物実測図の番号と写真の番号は一致するように配置してある。

報告書抄録

ふりがな	はなぐすく							
書名	ハナグスク							
副書名	拝殿建設に伴う緊急発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	那覇市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第41集							
編著者名	玉城安明							
編集機関	那覇市教育委員会文化財課							
所在地	〒900-0022 沖縄県那覇市樋川2丁目8番8号 TEL 098-853-5775							
発行年月日	西暦1999年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
はなぐすく ハナグスク	なは はしづかさ 那覇市若狭 1丁目25番11号	47201	26° 13' 00"	127° 40' 22"	1993 2 11 1993 3 05	130	拝殿建設 工事に伴 う緊急発 掘	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
ハナグスク		沖縄貝塚時代後期 14~16世紀		在地土器 中国産青磁 中国産白磁 中国産青花 中国産褐釉陶器 中国産黒釉陶器 タイ産半練土器 タイ産褐釉陶器 タイ産無釉炻器 産地不明瓦質陶器 備前産陶器 金属製品 ガラス玉 高麗系瓦 錢貨				

目 次

序

例 言

報告書抄録

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 位置と環境	1
第3章 調査体制	5
第4章 調査経過	5
第5章 層序	7
第6章 遺物	9
1 土器	9
2 青磁	12
3 白磁	16
4 青花	16
5 褐釉陶器	16
6 黒釉陶器	19
7 タイ産半練土器	19
8 タイ産褐釉陶器	21
9 タイ産無釉炻器	21
10 備前産陶器	21
11 産地不明瓦質陶器	23
12 金属製品	23
13 ガラス製品	23
14 高麗系瓦	23
15 錢貨	23
第7章 まとめ	29

挿図目次

- 第1図 那覇市の位置
第2図 那覇市およびその周辺の主要な遺跡
第3図 遺跡の位置
第4図 調査の位置
第5図 層序
第6図 土器：鉢形・甕形・壺形・杯形・底部
第7図 青磁：碗
第8図 青磁：盤・皿・杯・茶入れ・香炉・瓶
青花：碗
第9図 白磁：碗・杯・皿
第10図 褐釉陶器：大型壺・小型壺・茶入れ
黒釉陶器：天目
タイ産半練土器：蓋・身
- 第11図 タイ産褐釉陶器：壺
タイ産無釉炻器：壺・甕
第12図 褐釉陶器：擂鉢
備前産陶器：擂鉢
産地不明瓦質陶器：擂鉢
第13図 金属製品：飾り金具・鈴
ガラス製品：玉
高麗系瓦
第14図 錢貨
第15図 錢貨

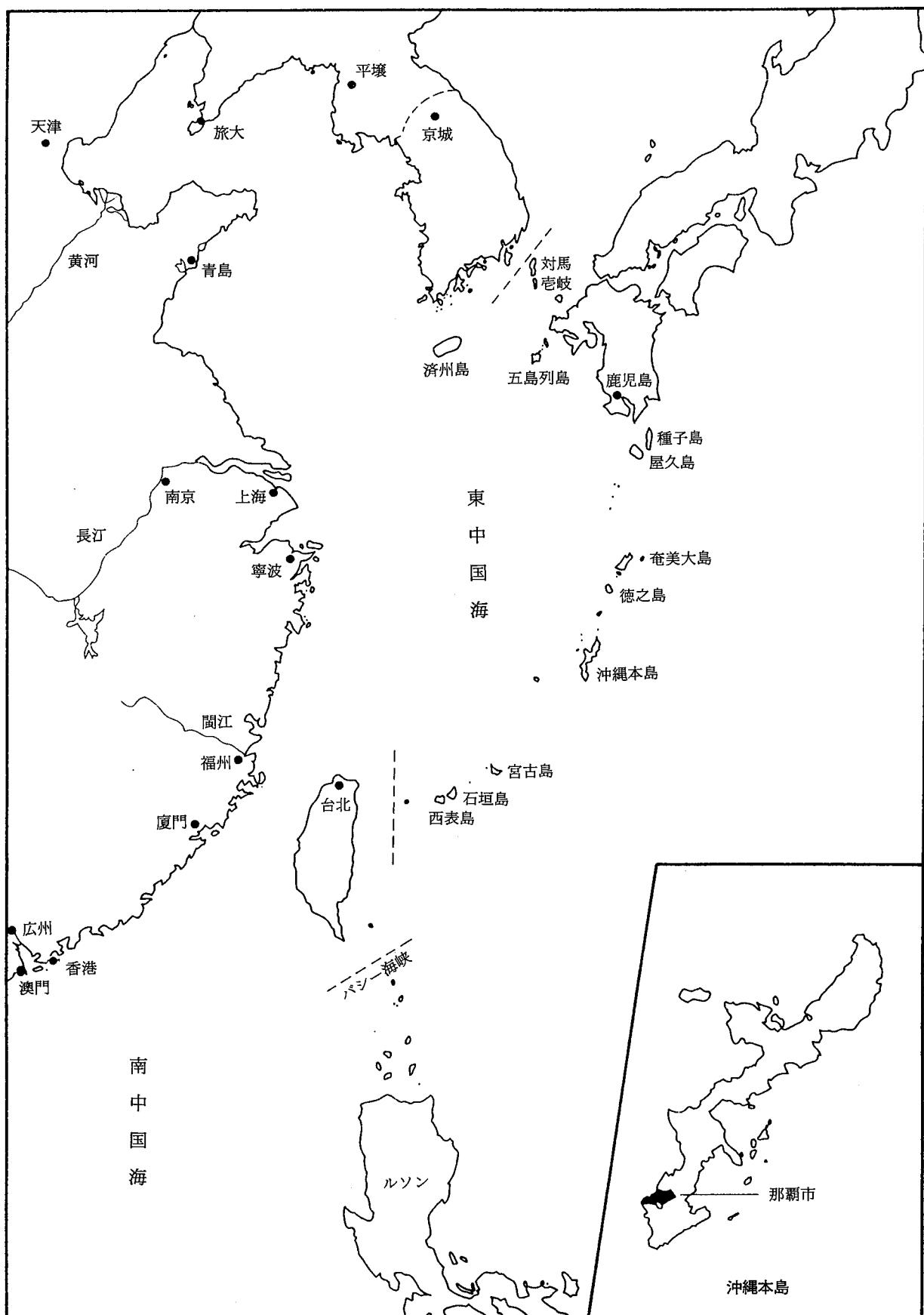
挿表目次

- 第1表 出土遺物一覧
第2表 土器観察一覧
第3表 青磁観察一覧
第4表 白磁観察一覧
- 第5表 錢貨観察一覧

図版目次

- P L. 1 発掘調査の状況
P L. 2 発掘調査の状況
P L. 3 発掘調査の状況
P L. 4 土器
P L. 5 青磁
P L. 6 青磁
青花
P L. 7 白磁
P L. 8 褐釉陶器
黒釉陶器
タイ産半練土器

- P L. 9 タイ産褐釉陶器
タイ産無釉炻器
P L. 10 褐釉陶器
備前産陶器
産地不明瓦質陶器
P L. 11 金属製品
ガラス製品
高麗系瓦
P L. 12 錢貨
P L. 13 錢貨



第1図 那覇市の位置

第1章 調査に至る経緯

波上宮では拝殿新築の計画があり、同者より埋蔵文化財の有無について平成4年9月22日付で当教育委員会へ照会がなされた。

当教育委員会では当該地内での文化財について充分把握されて無く、かつ後方崖地に先史遺跡「波上洞穴遺跡」が所在するところから、試掘調査が必要である旨の回答を行った。調整の結果埋蔵文化財の確認調査を行うことになった。調査は教育委員会が主体となり、既存建物の撤去後、工事地内をバックホーを用いて試掘を行った。その結果台地西側に約130m²にわたって土器や中国産陶磁器などの出土があり、一部に遺物包含層の存在が確認された。波上宮へ遺跡有りとの調査結果を回答した。

当教育委員会は調査の結果を踏まえて、波上宮と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。協議の結果工事変更は困難との結論に達し、やむを得ず記録保存の措置をとることになった。

その後波上宮は、文化庁長官に文化財保護法第57条の2第1項の規定にもとづき「埋蔵文化財の発掘の届出」を提出した。これについて当教育委員会は文化庁の指導により、「工事着工前に発掘調査を実施」するよう送付通知した。

その後当教育委員会では文化財保護法98条の2第1項の規定にもとづき文化庁長官へ「埋蔵文化財発掘調査の通知」を提出し、発掘調査に着手した。調査に要する経費は波上宮が負担し、調査を当教育委員会が実施することになった。調査は平成5年2月11日より開始した。

なお『おもうさうし』第十 ありきゑとのおもう御さうしのなかの「はなくすぐ」は、現在の波上宮から護国寺の辺りの地を指す古名といわれており、その古名に因み遺跡名をハナグスクとした。

第2章 位置と環境

那覇市は東シナ海に面した沖縄本島南西部にあり、東に西原町、東南に南風原町、南に豊見城村、北に浦添市と接する、人口約30万人を擁する県下第一の都市である(第1図)。本市はほぼ三角形を呈し東西に約11km、南北に約8kmを測り、総面積37.81km²である。地形的には、東中国海側の平野部とそれを取り囲む琉球石灰岩の台地に大きく分けられる。台地側からは安謝川・安里川・国場川等の各河川が平野部を横断し東中国海へ注がれる。市内は国道58・330号が平野部を縦走しており、これら幹線を中心にアクセス道路が連結して市街地が形成され、さらに縁辺へと広がりつつある。この国道58号にほぼ沿って、安里川と国場川とを結ぶかたちで久茂地川が流れている。久茂地川は元々埋め立てにより造られた人工の川で、その西側はかつて“うきしま”と呼ばれる外海に浮かぶ小島であったという。尚巴志の頃から那覇港や泊港を中心とした交易港湾施設の整備が進められたようで、さらに尚金福の頃うきしまと首里とを繋ぐ海中道路が建設され、以降漸次埋め立てが進められる。明治初年頃の地図ではほぼ現在の川に近い(註1)。このうきしまは現在の久茂地・久米・東・西・若狭一帯にあたり、特に近世以降第二次大戦前まで旧那覇の中心として栄えることになる。遺跡はこのうきしまの西方端に位置する。

遺跡は那覇市若狭町地内に所在する。ここは東シナ海にほぼ北向きに突出した琉球石灰岩の台地で、三方は海に面した崖地となる。標高は約13m。低平な市街地にあって、小禄・首里各台地

番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	ギリチ原遺跡	17	識名原遺跡
2	崎樋川貝塚	18	識名シーマ御嶽遺跡
3	天久グスク	19	魚下原遺跡
4	ハナグスク	20	崎山御嶽遺跡
5	三重グスク	21	玉陵洞穴遺跡
6	屋良座森グスク	22	首里城跡
7	御物グスク	23	首里西森遺物散布地
8	ガジャンビラ貝塚	24	幸地グスク
9	那崎原遺跡	25	沢岷グスク
10	カニマン御嶽遺跡	26	内間遺跡
11	豊見城グスク	27	ヒヤジョー毛遺跡
12	根差部グスクチジ遺跡	28	銘苅原遺跡
13	長嶺グスク	29	安謝前東原遺跡
14	津嘉山クボ一遺跡	30	安謝東原南遺跡
15	宮平ノロ殿内遺跡	31	安謝東原遺跡
16	宮平遺跡	32	牧志御願東方遺跡

●後期～グスク時代

★グスク時代

■グスク



第2図 那覇市およびその周辺の主要な遺跡

からは一望のもとにある。

遺跡は現在波上宮境内となっている。波上宮は王府時代には琉球八社のひとつに数えられるなど、古くから信仰の地として名が知られるが、『琉球世譜』『球陽』『琉球国由来記』等によれば、察度王19（1368）年、薩摩から来島した頼重上人が鎮守社として熊野三所権現を勧請し、波上山護国寺を建立したといい、当初佛教寺院として出発したことがわかる。

その他波上権現の縁起に関する記事として『琉球神道記』『琉球国由来記』や『球陽』等で散見されるが、いずれも、崎山里主が海岸で拾った靈石の神託にもとづき祭ったことに由来するという。

おもろさうし第十 ありきゑとのおもろ御そうしには、下記のようなおもろがある（註2）。

（前略）

いしらごは おりあげて
ましらごは つみあげて
なみのうえ は げらへて
はなぐすく けらへて
ものまいり しょわちへ
てらまいり しょわちへ
かみも ほこり よわろへ
こんげんも ほこり よわろへ

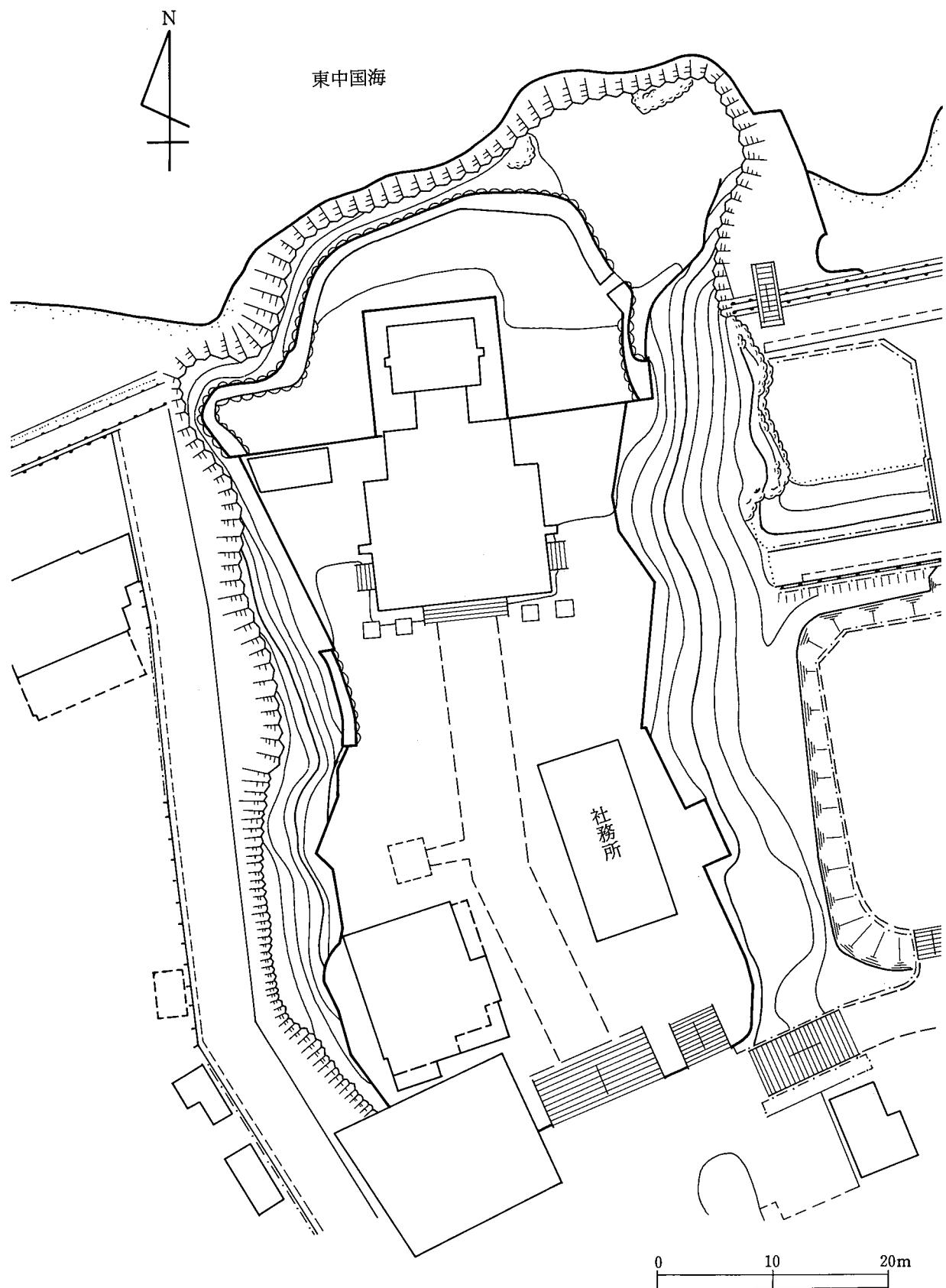
このおもろが実際いつ頃謡われたのか不明であるが、「なみのうえ」「はなぐすく」および「かみ」「こんげん」の名称が併記されているのは注意され、少なくともこれが謡われた頃波上と権現（護国寺）はほぼ同義に認識されており、神仏習合の様子が窺える。

頼重以降その後暫くは護国寺の具体的な動向は不明で、頼重入滅（1384）年以降嘉慶27（1548）年の頼玖まで164年もの住持空白がある。

嘉靖元（1522）年日秀上人の事績が語られる。『琉球国由来記』には嘉靖12（1522）年護国寺を再建したという。『球陽』にもやはり同様の記事がある。上人は護国寺を再興し、自刻の本地阿弥陀・薬師・観音の三像を安置している。尚豊13（1633）年には天願筑登之親雲上上権明が薩摩で神道を学び、秘書を持ち帰ったことが記述されており、他方尚豊13（1633）年波上消失し、同15（1635）年再建されたというから、この頃祭祀が整えられたようである。『琉球国志路』の琉球八景の「筍崖夕照」に波上宮の図が描かれている。周囲は石垣で囲まれ、内部に入母屋造りの屋根が三棟みえるが、この頃の様子を描いたものかもしれない。

明治6（1873）年の「琉球藩雜記」には大夫5石、内持2石、権祝部各1石、宮童1俵とある。廃藩置県後の明治23（1889）年には官幣小社に列格され、沖縄で最も格式の高い宮として確立する。

1967年波上宮後方崖中腹の洞穴において先史遺跡が発見され、同年高宮廣衛氏によって発掘調査が行われている（註3）。



第3図 遺跡の位置

第3章 調査体制

調査組織は次のとおりである。

調査責任者	那覇市教育委員会	教育長	嘉手納 是 敏
〃	那覇市教育委員会文化課	課長	高江冽 隆
調査 総括	〃	主幹	金 正 紀
調査 事務	〃	係長	新城 和 範
〃	〃	主事	手登根 朗
〃	〃	〃	赤嶺 優 子
調査員	〃	〃	島 弘
〃	〃	〃	内間 靖
〃	〃	〃	玉城 安 明
〃	〃	〃	仲宗根 啓

調査作業員 金秀建設株式会社が直接雇用した。

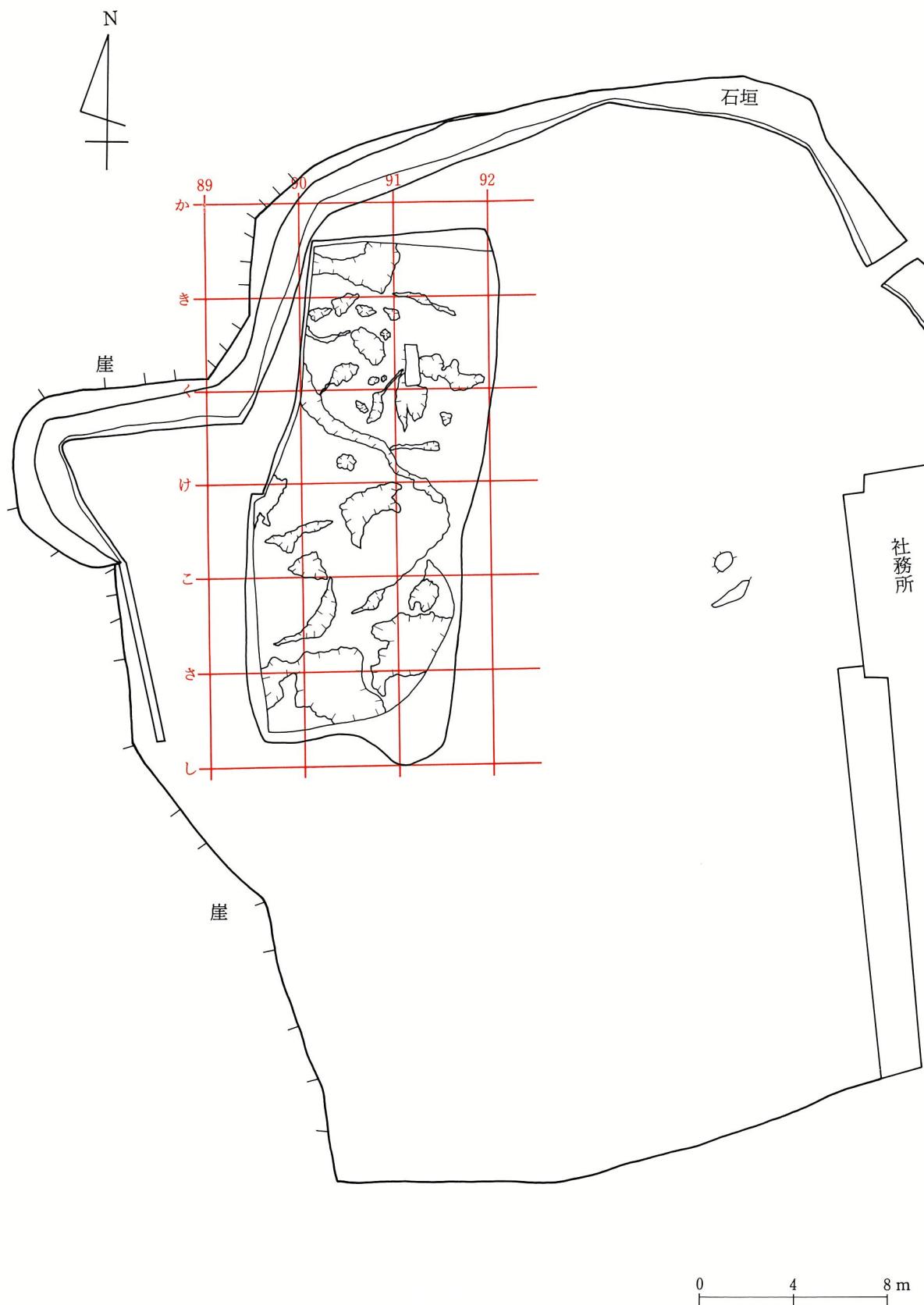
第4章 調査経過

調査では、工事に係る範囲約130m²を対象に実施した。調査範囲外ではすでに建設工事が始まつており、かつ工事進捗との兼ね合いから調査期間を一月と設定した。宮内には参詣者も多く、かなりの制約があった。ここは事前の試掘調査において判明している遺物包含層および遺物の採集できる範囲である。位置的には波上宮敷地内の最も奥まった場所で、現在の拝殿部分に重複する。

発掘区は東西に任意に直線を設け、これに4mピッチで平行に直線を設けた。一方これら東西ラインに直交する南北ラインを同じく4mピッチで設定した。南北(縦)軸を算用数字で、それに直交する東西(横)はひらがな五十音を付した。各グリッド名はそれぞれの北東隅の杭を指標とした。

調査では、試掘調査の際に確認した、か・き・く-91区の遺物包含層である黒色砂(後述の第5層)層の掘り方作業から開始した。第1章で述べたとおり当初陶磁器の出土があったことから、グスク時代の層と予想していたが、調査の過程で実際には先史時代の土器を包蔵する層もあることが確認された。陶磁器を包含する層(後述の第4層)は黒色砂層直上に薄く堆積することが確認された。か・き・く区での土層堆積の状況を踏まえ発掘区を南側へ広げていった。

南側では各層毎に出土遺物を一括して取り上げた。全調査区を基盤まで掘り下げ、各壁面のセクションの実測・写真撮影を行い調査を終了した。



第4図 調査の位置

第5章 層序

遺跡の層序は基本的に5枚認められる。以下のとおりである。

第1層：暗褐色混砂土層。戦後以降、現代までの遺物を含む層である。く-91グリッドにおいて第2層を切って堆積する。

第2層：茶褐色混土砂層。第4層にやや近い土色で、僅かに陶磁器類を含んでいるが、砲弾の破片を含む等、後世の遺物も含む攪乱層である。戦後造成されたとみられ、実際く・け-91グリッドでは、同層上部に旧表土面が確認されている。

第3層：白砂層。ほぼ全域に広がりの認められる層である。締まりは悪くサラサラしている。か・き-91グリッドにおいて赤瓦の集中がみられ、当初近世期に所属するものかとも考えたが、同層には近代の遺物を含んでおり、第二次大戦により被災した建物と判断された。概ね近代から戦時中にかけて一部戦後を含む層と考えられる。同層上部に炭や河原石（境内に敷き詰めた玉石か）を含んだ灰色砂の堆積が認められる、

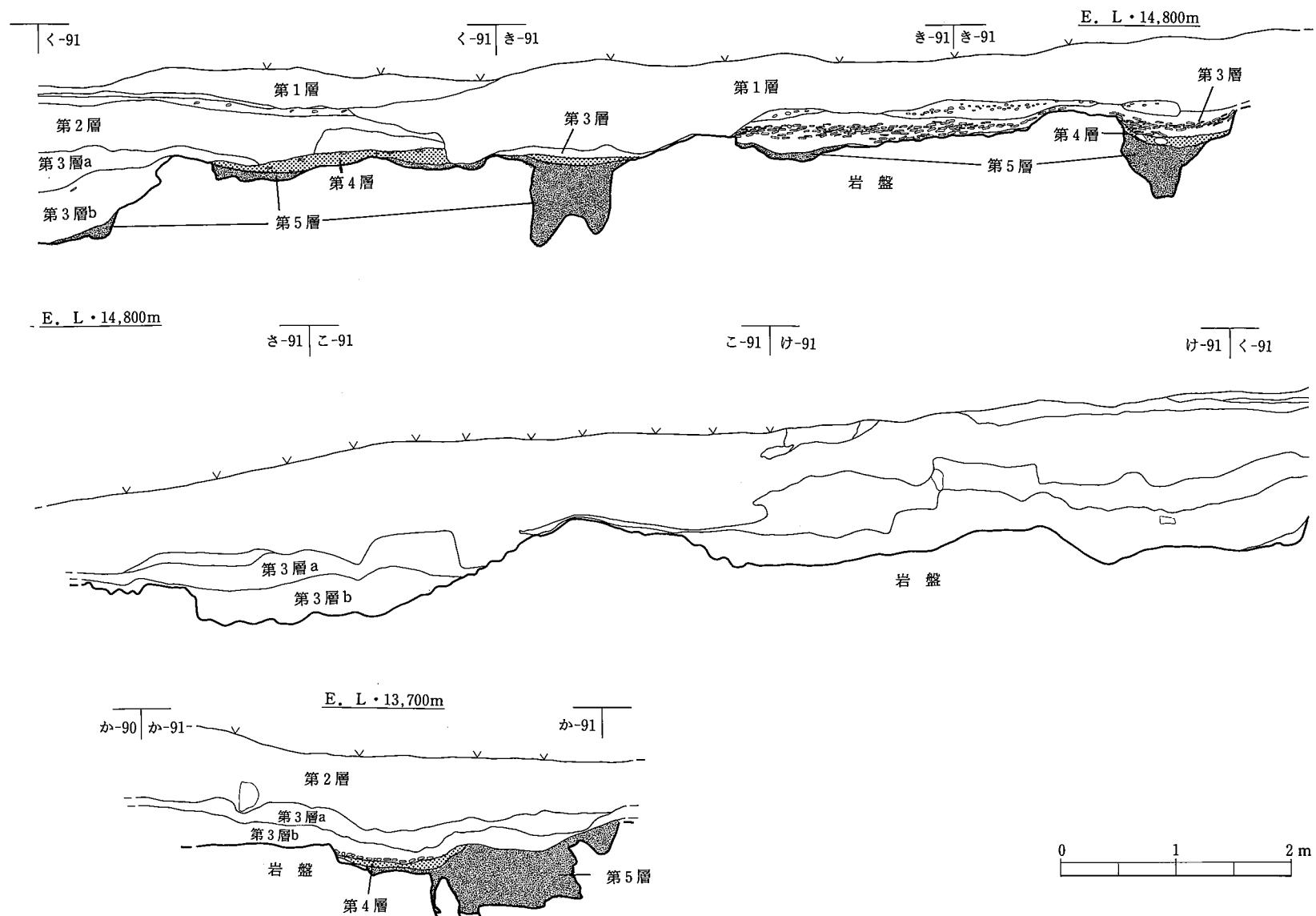
第4層：茶褐色土層。中国産陶磁器など、グスク時代中心に貝塚時代後期の遺物を包含する層である。ややしまりは悪い。き-91・92グリッドでは薄く、け-91グリッドではやや厚く堆積する。いずれも第5層直上の層準であるが、き-91グリッド北半部以北では第3層で切られており、その広がりはみられない。

第5層：黒色の砂層である。基盤である琉球石灰岩直上に堆積する沖縄貝塚時代後期およびグスク時代の遺物が混在する遺物包含層である。く・け・こ-91グリッドにその堆積が認められる。岩盤そのものは若干の起伏があって、窪みには厚く堆積する。層厚は厚いところで約70cm、薄いところで約4cmを測る。

か・き-91グリッドでは第2層および第4層の広がりは無い。状況から第1層により切られた模様である。く・け-91グリッドでは比較的安定した層序を示す。第2層上面には旧表土面が確認された。

遺跡は第4層および第5層をメインとする。ただしいずれの層も堆積は薄く、その範囲も狭い。特に第4層は本来く-91グリッド以北、基盤である琉球石灰岩の高まり部分にまで及んでいたものと考えられるが、第3層期以降の後世の攪乱により確認する事ができなかった。

か・き・く-91グリッドでの確認された第5層は、第1章で述べたとおり当初陶磁器の出土があったことから、グスク時代の層と予想していたが、調査の過程で実際には先史時代の土器をも包蔵する層であることが確認された。



第5図 層序

上: 91ライン (か・き・く-91グリッド西壁面)、中: 91ライン (け・こ・さ-91グリッド西壁面)、下: か-91グリッド北壁面

第6章 遺物

1. 土器

総数1,270点の土器片が得られた。器種でみると鉢形、甕形、壺形、杯形が確認された。この内、鉢形については沖縄貝塚時代後期、他はグスク系土器と呼ばれるものである。またこれらとは別に底部片については何れの器種に属するか不明なため一括して扱った。

1 鉢形 (第6図1~4)

口縁部から胴部へかけて僅かに膨らみ、下半部へ窄まりながら底部へと至る器形である。口唇～頸部にかけて刻文や貼り付け凸帯を巡らすなどの文様を施すものがある。先述のとおり沖縄貝塚時代後期とみられる土器である。

2 甕形 (同図5)

口径は大きく口縁部は外反、頸が締まり胴部で大きく膨らむ器形である。グスク時代に特徴的な器形である。

3 壺形 (同図6・7)

1類 甕形に比べて口径の小さく肩の張るものである。口縁部はほぼ直立する。

2類 口径は1類に比べさらに小さく長頸。肩は張らずにそのまま胴部へ移行する。

4 杯形 (同図8)

形態的には甕形を小振りにした器形である。糸数城跡においてやや似た器形の資料がある。

第1表 出土遺物一覧

種類 層序	土 器					青 磁					白 磁			青花		褐釉陶器			黒 釉 陶 器	タ 練 イ 陶 器	タ 陶 器	タ 無 釉 陶 器	備 前 陶 器	産 地 不 明 陶 器	金 屬 製 品	ガ ラ ス 製 品	高 麗 系 瓦	銭 貨	計				
	鉢 形	甕 形	壺 形	杯 形	底 部	そ の 他	碗	盤	皿	杯	茶 入	香 炉	そ の 他	碗	杯	皿	そ の 他	そ の 他	大 型 壺	小 型 壺	茶 入 れ	そ の 他	半 器	イ 土 半 器	褐 釉 器	イ 土 半 器	褐 釉 器	イ 土 半 器	高 麗 系 瓦	銭 貨			
第3層					2	19	4			1	28	2	3	32		4		2	1	4		1	1			1	105						
第4層	4	3			123	6	2			2	1		2	3				2	2	1					1	1	12	165					
第5層	45	10	7	1	9	317	61	9	15	1		40	12	7	25		4	3	7		6			1	1		11	592					
搅乱一括		5	12	661	47	11	4	1	1		45	4	11	82		4	2	1			17	1		5			13	999					
試 堀						2		2				1	2	2		2		13	2			4	1				1	32					
表 採						1	1				1																	3					
計	120	10	15	1	21	1,103	136	27	21	2	1	1	3	115	19	25	144		14	3	24	7	1		11	22	1	2	6	1	1	37	1,896

5 底部 (同図9~12)

器種の特定が出来ないものも含んでおり、ここで一括した。

1類 尖底 (同図9)

尖り底で平坦な面を持たない。貝塚時代後期に特徴的な底部である。

2類 くびれ平底 (同図10・11)

外底面から胴部への立ち上がり部にくびれを有する底部である。10は内底が凹面を呈し、沖縄貝塚時代後期の特徴を残す。

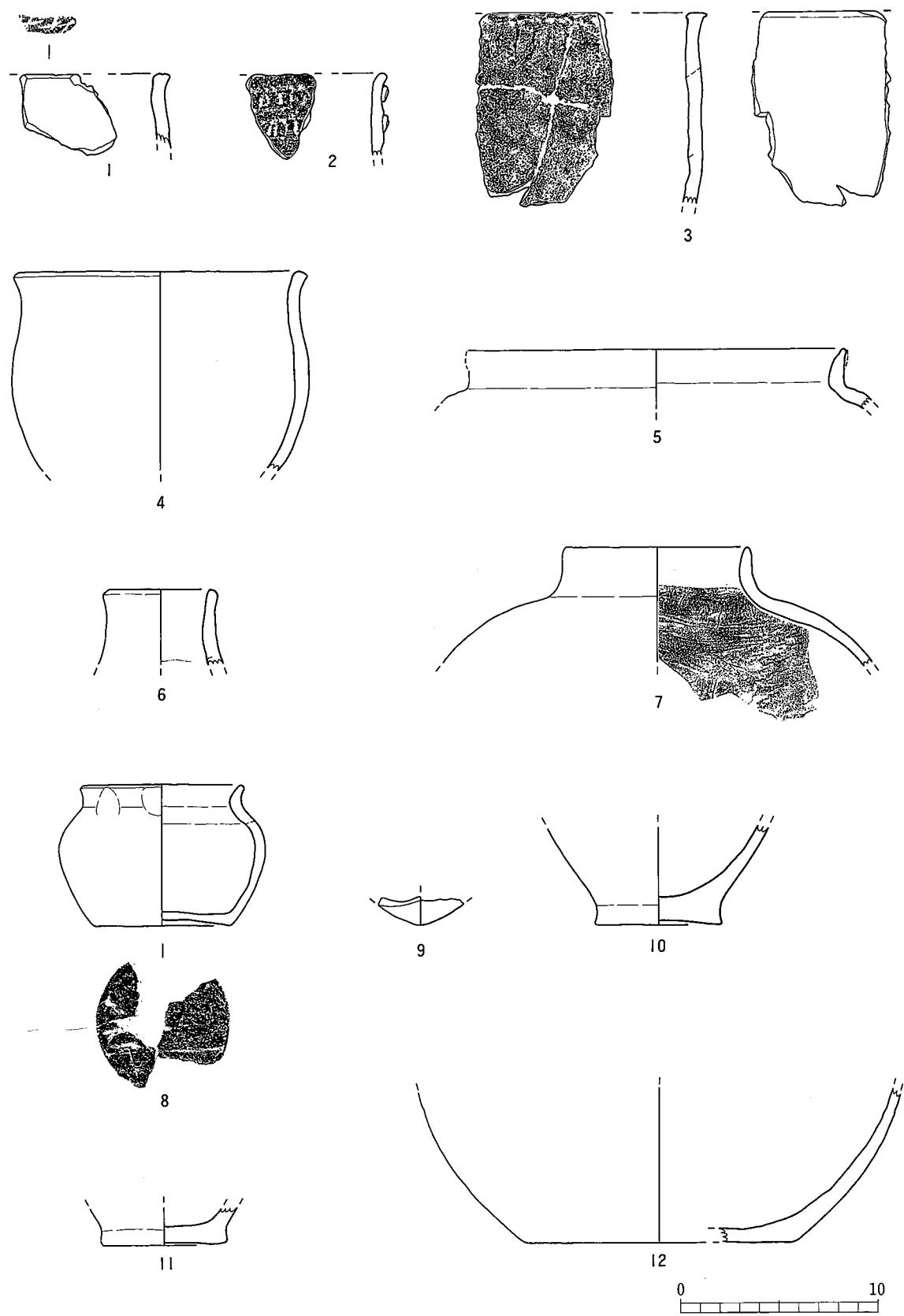
3類 平底 (同図12)

底径の広い平底である。器面や胎土の状況からグスク系土器である。甕あるいは壺形に属するものとみられる。

第2表 土器観察一覧

法量はcm

挿図番号 図版番号	地 層 点 序	器 種	分 類	口 径 器 底 高 厚	器形の特徴	文様・器面調整等の特徴	焼 成	色 調	混和材
第6図1 PL.4の1	か-91 第5層	深鉢 形		— — — 0.7	口縁部直下で僅かに締まり、口唇部外縁で若干張り出す。 口唇部断面は平坦。	口唇部に斜位の刻紋線を施す。	や や 軟 質	茶 褐 色	石灰質砂粒
〃2 〃2	攢乱一括 取り上げ	〃		— — — 0.6	口縁部直下で僅かに締まり、口唇部で微弱な外反。 口唇部断面は丸味を帯びる。	口縁直下に縦位の刻目を有する凸帯を二条貼付する。内外面ともナデ調整。	〃	橙 色	石灰質砂粒 赤色粒子
〃3 〃3	〃	〃		— — — 0.8	口縁部から胴部へかけて垂下する。口唇部は内外に張り出す。同部の断面は平坦。	器面は指もしくはヘラによる圧痕を残し凸凹する。	〃	〃	石灰質砂粒 赤色粒子
〃4 〃4	き-91 第4層	〃		14.2 — — 0.7	頸部で締まり口縁部は外反。胴部で丸く膨らむ。 口唇部断面はやや平坦。	内外面ともナデ調整しており、丁寧なつくりだが器肌はザラザラした手触り。	〃	茶 褐 色	石灰質砂粒 黒色鉱物
〃5 〃5	攢乱一括 取り上げ	甕 形		19.0 — — 0.7	頸部から上位は直立、下部は大きく張り出し膨らむ。 口唇部断面は尖状とみられる。	内外面とも横位のナデ調整するが、内面は混入物の擦れやアバタがみられる。	や や 硬 質	橙 色	石灰質砂粒
〃6 〃6	〃	壺 形	2 類	5.2 — — 0.7	細頸の壺。口縁部は微弱な外反を示し、下部へ漸次広がる模様。	全体にナデ調整するが、僅かに指による成形痕を残す。	〃	〃	石灰質砂粒 石英
〃7 〃7	く-91 第5層	〃	1 類	9.2 — — 0.8	頸部から上位は直口、胴部へかけては大きく膨らむ。	外面は入念なナデ調整。内面は頸部以下に横位の擦痕が残る。	硬 質	〃	雲母?
〃8 〃8	き-91 第5層	杯 形		7.8 7.1 6.8 0.6	口縁部は外反。胴部で張り出し、漸次窄まりながら底部へ至る。身は低い。 底面上げ底。	全体にナデ調整を施すが、頸部に成形時の指圧痕を残す。 外底面に木の葉圧痕有り。	や や 硬 質	橙 色	石灰質砂粒 石英
〃9 〃9	か-91 第5層	底 部	1 類	— — — —	やや丸味を帯びた底部の先端。	外面は入念なナデを施す。	〃	淡 紅 色	石灰質砂粒
〃10 〃10	〃	〃	2 類	— — 6.3 1.2	底部立ち上がりでくびれ胴部へ開く。	内外面とも丁寧にナデ調整するが、器肌はザラザラした手触り。 内底面に焼成時の亀裂有り。	や や 硬 質	茶 褐 色	石灰質砂粒 黒色鉱物
〃11 〃11	〃	〃	2 類	— — 6.2 0.8	底部立ち上がりでくびれ胴部へ開く。	底面からの立ち上がり部に成形時の指圧痕を残す。	〃	橙 褐 色	赤色粒子
〃12 〃12	攢乱一括 取り上げ	〃	3 類	— — 13.6 0.7	底面から胴部へ大きく開いて立ち上がる。底面との境は稜をつくる。	内外面ともナデ調整するがやや雑で凹凸を残す。 アバタが、特に内面に顕著にみられる。	や や 軟 質	淡 橙 色	石灰質砂粒 赤色粒子



第6図 (PL. 4) 土器：鉢形 (1～4)、甕形 (5)、壺形 (6・7)、杯形 (8)、底部 (9～12)

2. 青磁

総数306点の青磁片が得られた。碗、盤、皿、杯、瓶、茶入れ、香炉などの器種がある。これら特徴を簡記する。

1 碗

1類 片切彫り蓮弁文碗 (第7図1)

鎬の稜は明瞭でなく、蓮弁の厚みもあまり無い。蓮弁のまわりを籠で片切彫りする。

2類 無鎬蓮弁文碗 (同図3)

鎬の無い蓮弁文で、蓮弁のまわりを籠で描いている。

3類 無文直口碗 (同図7)

口縁部が直口するものである。器面内外に文様はみられない。

4類 細蓮弁文碗 (同図2)

外体面に線描きの細い蓮弁文を描く。

5類 無文外反碗a (同図4・6)

一般に佐敷タイプと呼ばれる碗である。内底面の釉を削りとる。内外体部に文様はなく、無文としたが、内底面に印花花文を施す。

6類 無文外反碗b (同図5)

前記aと同じく体部に文様のないものだが、内底面も施釉しており、同部に印花花文を施す。

7類 無文内湾碗 (同図8)

胴部から口縁部へ内湾気味に移行する器形である。内底面に蛇の目釉剥ぎを有する。

2 盤 (第8図1~3)

1類 鎬縁盤で、鎬外縁が折れ曲がり直立する。内面の蓮弁は細く細かい (第8図1)。

2類 鎬縁盤で鎬外縁は稜花をつくる。内面は幅広の籠で蓮弁文を描く (同図2・3)。

3 皿 (同図4~6)

何れも腰部から口縁部にかけて外反する。内底面に草花花文を施す。

4 杯 (同図7)

無文で胴部から口縁部にかけて内湾気味の器形を示す。底部は碁笥底である。今帰仁城跡でやや似た資料が検出されている (註4)。

5 茶入れ (同図8)

腰折れの茶入れである。腰部から上位へはほぼ直線的に延びる。底部はやや上げ底気味の平底で、その周りに三個の足が附く。

6 香炉 (同図9)

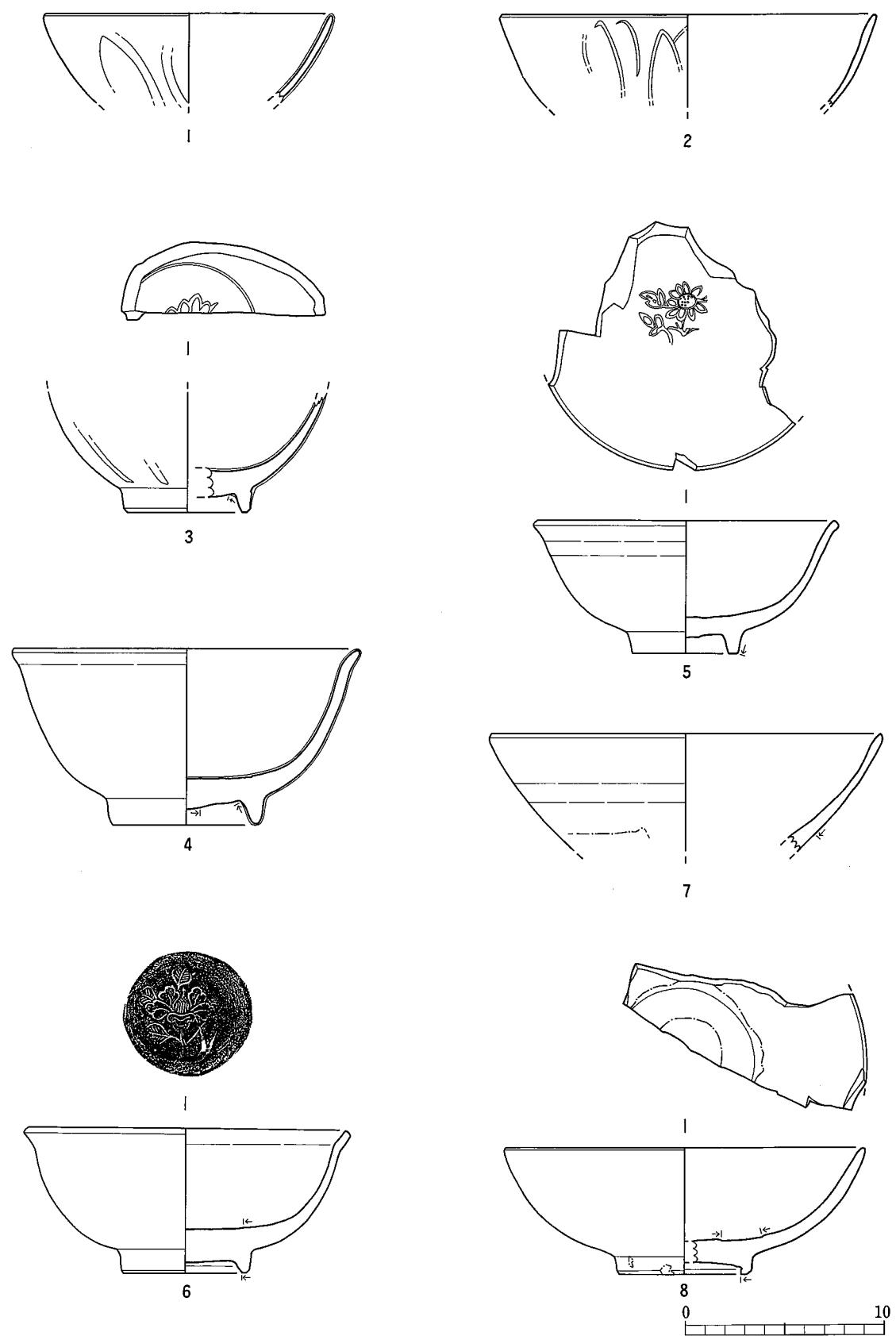
胴部は膨らみ頸部で若干窄まりながら直立、口縁部で折れ外反する。器体下半部には三脚が附く。

7 瓶 (同図10)

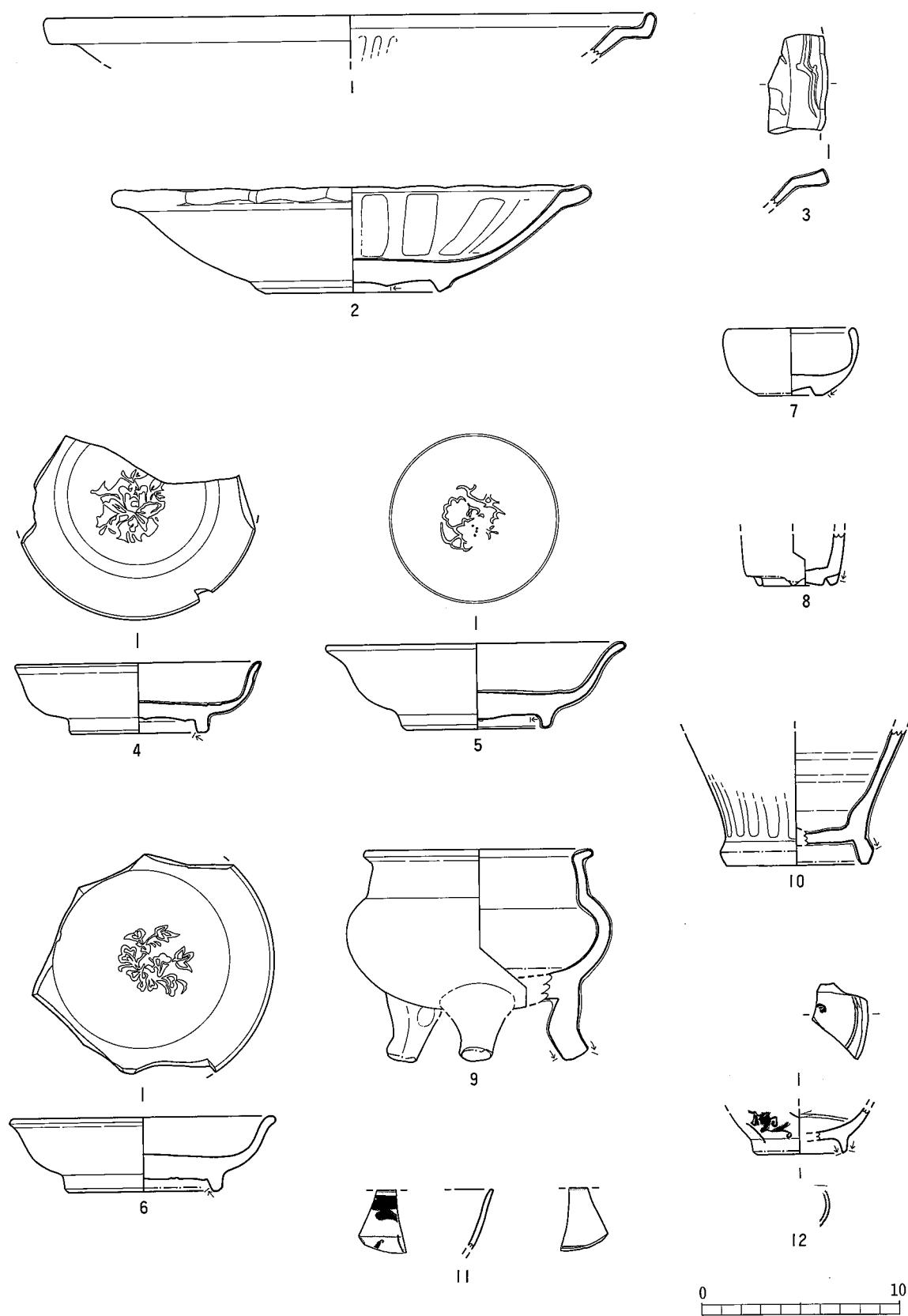
上げ底状の底部で、胴部に蓮弁様の抉りを有する。

第3表 青磁観察一覧

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層位	器種	分類	口 径 器 高 高 第 径 (cm)	素 地	施 紬	釉 色	貫 入	文様の特徴等
第7図1 PL.5の1	攪乱一括 取り上げ	碗	片切 彫り	14.4 — —	灰白色でやや 微粒子	内外面にやや厚い 透明釉。	淡 緑 色	内外面ともに やや粗い	
〃2 〃2	き-91 第5層	〃	細 蓮 弁	18.7 — —	〃	内外面に薄い透明 釉。	淡 青 色	内外面ともに 粗い。	細い線描きによる文 様。蓮弁も細く、や やくずれている。
〃3 〃3	攪乱一括 取り上げ	〃	無 鎬 蓮 弁	— — 6.0	〃	外底面は露胎。		なし	内底面に印花文。外 面の蓮弁は鎬による 片切彫り。
〃4 〃4	く-92 第3層	〃	無 文 外 反	14.9 6.7 5.2	淡紅色・灰白 色で微粒子。	厚い透明釉を前面 施釉の後、外底面 を蛇の目状に搔き 取る。	青 緑 色	内外面とに細 かい。	文様なし。 いわゆる佐敷タイプ。
〃5 〃5	く-91 第5層	〃	〃	17.4 8.8 7.4	灰白色でやや 微粒子。	薄い透明釉を施 釉。内底面露胎。	青 緑 色	やや細かいが 部分的に粗密 がある。	内底に印花文有 り。
〃6 〃6	き-92 第5層	〃	〃	19.6 — —	灰白色で微粒 子。白色粒子 混入。	やや薄い透明釉を 施釉。内底面及び 高台内面は露胎。	黄 青 色	なし	内底面露胎部に花花 文有り 佐敷タイプ。
〃7 〃7	攪乱一括 取り上げ	〃	無 文 直 口	15.8 7.3 6.2	灰白色で微粒 子。黑色粒子 混入。	薄い透明釉。 残存部外面下半部 で釉切れ。	青 緑 色	口縁部内外面 にやや細かい 貫有り。	なし
〃8 〃8	〃	〃	無 文 内 湾	17.9 6.4 6.4	灰色。 やや粗粒子。	薄い半透明釉。内 底に蛇の目釉剝 ぎ。外面疊付から 内底は露胎。	淡 黄 褐 色	なし	なし
第8図1 PL.6の1	か-91 第5層	盤	1	30.4 — —	灰白色。 微粒子。 黒色粒子混入。	やや薄い透明釉。 残存部において総 釉。	淡 青 色	内外面ともや や細かい。	内面に先端の丸い鎬 による細かな蓮弁文。
〃2 〃2	攪乱一括 取り上げ	〃	2	23.2 5.3 8.8	灰色。 微粒子。	やや薄い透明釉で 内面総釉。	淡 青 緑 色	内外面とも細 かい。	鎬上面縁に沿って浅 い線刻文。内面には 幅広の鎬による浅い 蓮弁文。
〃3 〃3	こ・さ-91・92 第3層	〃	〃	— —	灰白色。 微粒子。	残存部において総 釉。	〃	内外面ともや や粗い。	鎬上面縁に沿って2 本一組の線刻文。内 面に幅広の鎬による 蓮弁文。
〃4 〃4	か-91 第5層	皿		12.0 3.6 6.6	〃	透明釉を厚めに掛 ける。高台内縁は 露胎。	〃	なし	内底に印花文有 り。
〃5 〃5	試掘	〃		14.8 4.3 7.1	〃	厚い透明釉を前面 に施釉のあと蛇の 目状に搔き取る。	青 緑 色	なし	〃
〃6 〃6	く-91 第5層	〃		13.2 3.8 7.4	〃	やや薄い透明釉外 底から疊付内面は 露胎。	淡 緑 色	内面に僅かに 粗い貫有り。	〃
〃7 〃7	攪乱一括 取り上げ	杯		6.2 3.4 3.2	〃	外底面際まで施 釉。		内面ともやや 細かい。	なし
〃8 〃8	〃	茶 入 れ		— — 3.0	淡紅色。 粗粒子。	体側部までを施釉 するが、一部高台 際まで釉垂れする。	灰 綠 色	極く細かい。	〃
〃9 〃9	く-92 第4層	香 炉		11.4 10.6 —	灰白色。 微粒子。	透明釉を厚く掛け る。脚部底面は露 胎。内底に一部釉 切れ有り。	青 緑 色	なし	〃
〃10 〃10	〃	瓶		— — 7.1	淡紅色。 微粒子。	透明釉を厚く掛け る。疊付および外 縁は露胎。	淡 綠 色	〃	外面は片切り彫りに よる蓮弁文。



第7図 (PL. 5) 青磁:碗



第8図 (PL. 6) 青磁:盤 (1~3)、皿 (4~6)、杯 (7)、茶入れ (8)、香炉 (9)、瓶 (10)、
青花:碗 (11・12)

3. 白磁

188点の出土をみた。碗・杯・皿の器種がある。

1 碗 (第9図1・2)

いずれも器体下半部の資料で、全体の器形は不明である。残存部において腰部で内湾して上位へ至る。全体に肉厚である。内底は凹面となる。高台は断面が方形で内割りは浅く、畠付は平坦である。

2 杯

1類 外反杯 (同図3・4)

口縁部が外反するものである。

2類 八角杯 (同図5)

腰折れの杯で、腰部から口縁部まで八角に仕上げられている。口唇は平坦。

3類 内湾杯 (同図6)

口縁部が内湾するタイプである。

4類 台付杯 (同図7)

体部は口縁部で外反、腰部の膨らみも強い。台部は欠失しており形状は不明。一般に馬上杯と呼ばれる。

3 皿

1類 外反皿 (同図8)

口縁部の外反する。内底はほぼ平坦で中途で立ち上がる。高台の形状は同図2の碗に似る。

2類 内湾皿 (同図9～13)

体部は緩やかなカーブを描いて内湾し口縁部へ至る、薄手の皿である。同図9は内底に蛇の目釉剥ぎを有する。同図13は口唇が平坦である。

4. 青花

少量ながら17点の青花が得られた。全て細片であるが、器形の推定できるものは何れも碗である。2点を図示した (第8図11・12)。

5. 褐釉陶器

中国産の褐釉陶器である。器種でみると大型壺・小型壺・茶入れ・擂鉢がある。

1 大型壺 (第10図1)

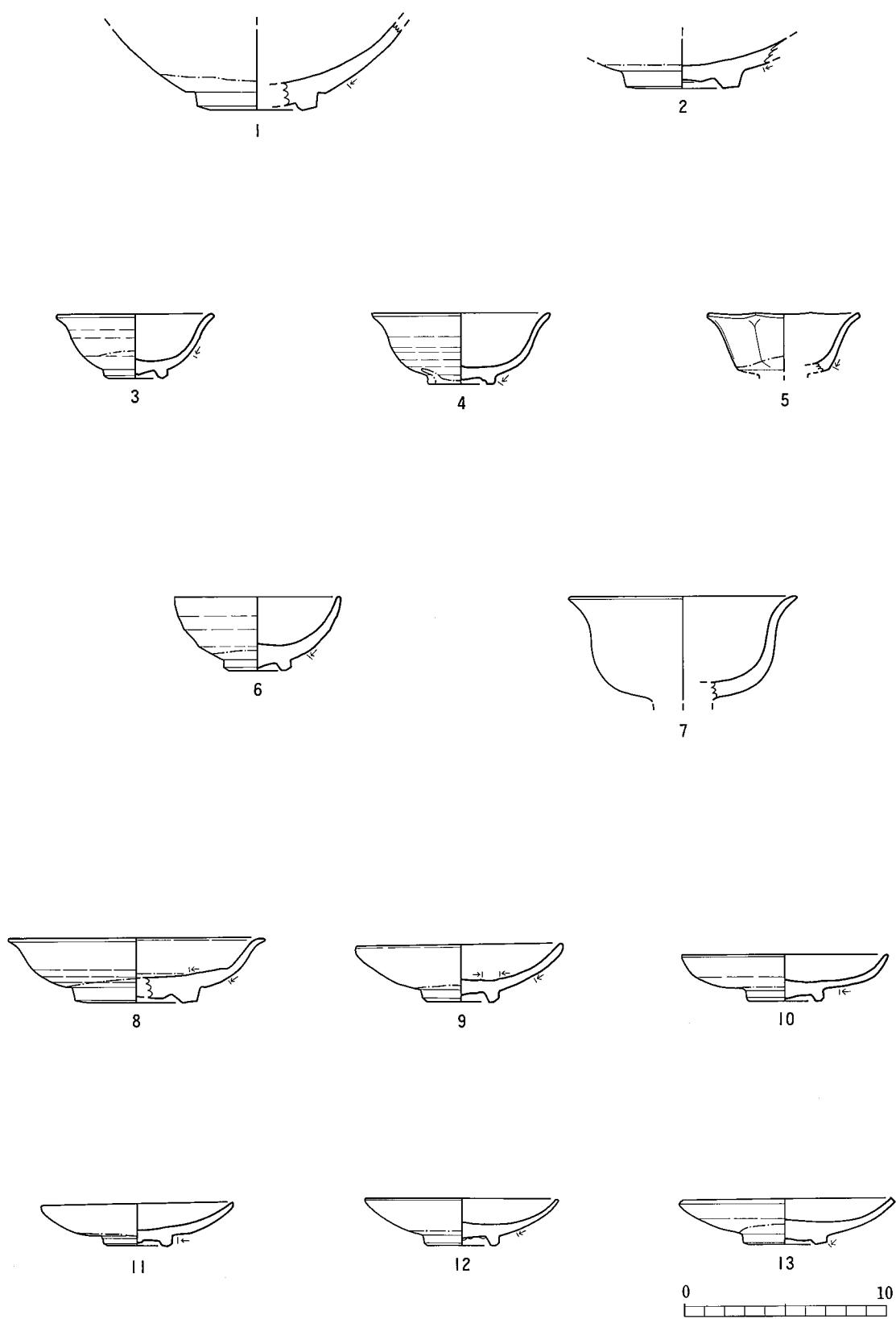
口縁部は略方形状に肥厚し短い頸を持つ。口縁部上端と内縁には稜を持つ。口径20.8cm。肩の張りは強く、現存部ではほぼ水平に広がる。胎土は淡灰色でやや粒子は粗く、石英・黒色鉱物を僅かに含む。器面内外とも残存部において茶色の釉を施す。搅乱一括取り上げ。

2 小型壺 (同図2～6)

同図2は口縁部が玉縁状に肥厚する。口径10.2cm。暗褐色の釉である。胎土は紅褐色でやや粗

第4表 白磁観察一覧

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層位	器種	分類	口 径 器 高 高第径 (cm)	素 地	施 紬	釉 色	貫 入	備 考
第9図1 PL.7の1	く-91 第5層	碗		— — 5.9	灰白色で微粒子。若干アバタ有り。	外面下半部で釉切れ。	淡 杯 色	内外ともやや細かい	比較的厚手で高台も重厚。
〃2 〃2	く-91 第5層	〃		— — 5.6	白色で微粒子。若干アバタ有り。	〃		なし	高台の削り出しは低く、疊付も厚い。
〃3 〃3	攪乱一括 取り上げ	杯		7.6 3.2 2.7	白色。胎土はやや粗く半磁器質。	器体中央で釉切れ。	乳 白 色	極く細かい	
〃4 〃4	〃	〃		8.8 3.5 3.1	乳白色で微粒子。	外面高台脇まで施釉。	灰 白 色	極く細かな貫で、特に外面で顯著。	露胎部分にロクロ成形痕を残す。
〃5 〃5	こ・さ-91・92 第3層	〃		7.4 — —	白色で微粒子。	透明感のある釉で外面腰部で釉切れ。	青 白 色		口縁部から腰部へかけて八角の面をつくる。腰折れ。
〃6 〃6	〃	〃		8.0 3.6 3.6	白色。胎土はやや粗く半磁器質。	内面総釉。外面は下位で釉切れ。	乳 白 色	細かいが、外外面は部分的に粗密がある。	外面に僅かにロクロ成形時の削り痕あり。
〃7 〃7	〃	〃	馬上杯	11.0 — —	白色で微粒子。	薄い透明釉。残存部分は総釉。	白 色	〃	高台部分は細い。馬上杯とみられる。
〃8 〃8	攪乱一括 取り上げ	皿		12.6 3.2 6.0	灰白色で微粒子。極く僅かに黒色粒子あり。	内面見込み中央および外面下半部以下は露胎。	灰 白 色	極細かい。特に内面で顯著。	内面見込みと外面腰部にロクロ成形時の削り痕を残す。
〃9 〃9	〃	〃		10.2 2.9 3.2	白色でやや微粒子。	薄い透明釉。内面見込みは蛇の目釉剝ぎ、外面は腰部以下で露胎。	乳 白 色	全体に極細かい	
〃10 〃10	〃	〃		10.0 2.3 3.4	白色で微粒子。	薄い透明釉で、外面は高台脇まで施釉。	青 色 白	なし	内外面、特に外面にはロクロ成形時の削り痕を残す。
〃11 〃11	〃	〃		9.4 2.2 3.0	〃	〃	〃	なし	内面見込みに三ヶ所重ね焼き時の目土の剝ぎ取り痕が残る。
〃12 〃12	〃	〃		9.4 2.3 3.4	乳白色。胎土はやや粗く半磁器質。	一部高台に釉たれ	乳 白 色	内外面とも細かい。	
〃13 〃13	〃	〃		10.3 2.3 4.1	〃	〃	〃	〃	



第9図 (PL. 7) 白磁: 碗 (1・2)、杯 (3~7)、皿 (8~13)

い。表土剥ぎ攪乱より出土。同図3は略三角形に肥厚した口縁部で口径8.3cm。薄手で小振りの壺である。肥厚部から胴部への移行は比較的緩やかで器面に輶轆痕を残している。頸部に縦型の把手を有する。胎土は比較的密で灰色を呈する。内外面とも頸下部までを施釉範囲とするが、刷毛による釉掛けが不充分で、部分的に露胎をみせる。釉色は褐色。攪乱一括取り上げ。同図4は縦の把手部分である。焼成は不十分で素地は橙色で釉は淡褐色を呈する。胎土に石英を含む。内面残存部中途から下位は露胎である。攪乱一括取り上げ。

同図5・6は底部資料である。前者の焼成はやや不十分で素地釉色が同図4に共通する。やや薄手で外面胴部下半部で釉切れとなり、底部に釉垂れがみられる。内面は露胎である。底径8.6cm。同図6は灰褐色の釉掛けの資料である。胎土はやや粗粒子で淡灰色。石英・黒色鉱物を含む。底径9.8cm。前者はき-91グリッド 第4層出土。後者は攪乱一括取り上げ。

3 茶入れ（同図7）

下半部を残す底径2.2cmの小品である。胎土は茶褐色で密。ベタ底で外底面に糸切り痕を残す。外面に暗茶褐色の釉を底部近くまで掛ける。内面は露胎。識名シーマ御嶽遺跡で類例資料が出土している（註5）。く-92 第4層。

4 撮鉢（第12図1）

折り曲げによる肥厚口縁を持つ内湾器形の撮鉢。口縁内縁および外縁は尖る。推算口径29.5cm。素地はやや粗く、石英・細かい砂粒を多く含んでおり、ざらつく。やや赤みを帯びた褐色の器色で、内外面口縁直下に暗褐色の釉を掛ける。外面には輶轆成形時の凹凸を残す。内面には10条を単位とする撮目を持つ。攪乱一括取り上げ。

6. 黒釉陶器

黒釉の天目茶碗の破片が11点検出されている。この内3点を図示した（第10図8～10）。

同図8・9は口縁部資料である。胴部から上位へ斜めにのび、口縁部近くでやや立ち上がる。口唇部は尖り気味となる。素地はともにやや粗粒子で淡黄色であるが、同図8は灰色の部分がある。両者とも黒色の釉であるが口縁部近くは禾目がみられる。それぞれ口径は11.6cm、11.8cmを測る。前者は攪乱一括取り上げ、後者はか-91グリッド 第5層の出土。

同図10は底部資料である。底面は浅い内割りを持つ。釉はガラス質の黒色釉を厚く掛け、禾目がみられる。底径3.2cm。攪乱一括取り上げ。

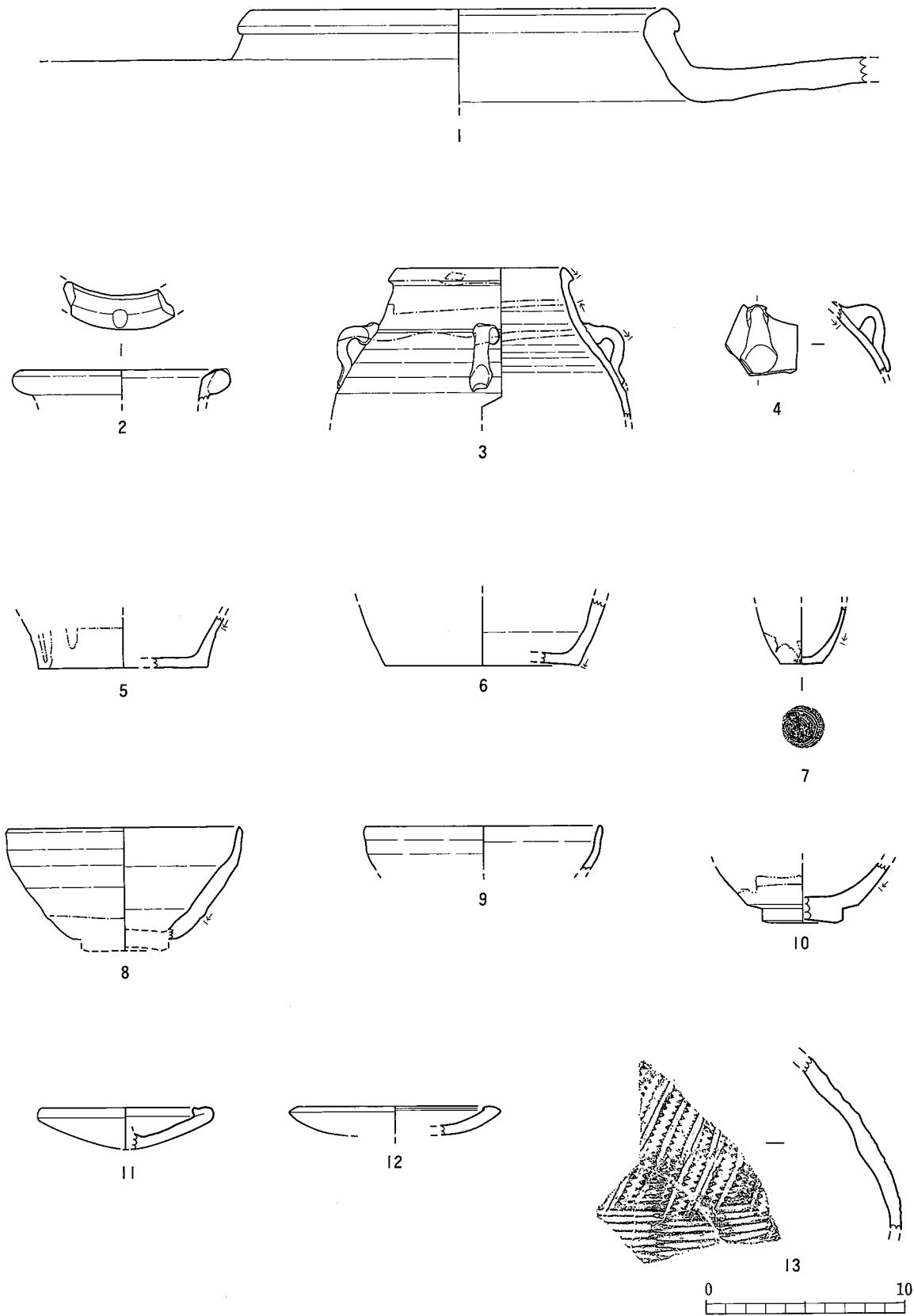
7. タイ産半練土器

近年県内でも出土例の増加のみられる土器である。身と蓋からなる。身は20点の破片が検出されているが、破片の量・焼成・器色・胎土の状況から、1個体分と思われる。

蓋は2点の出土（第10図11・12）があった。いずれも別個体資料である。

第10図13は身の資料である。頸部から胴部へ移行する箇所の破片で、口縁部から漸次膨らみ、胴部で湾曲しながら底部へ至る。残存部外面上位に擦り糸様の圧痕を、同下部で横位の叩き目を残す。内面は無文だが、製作時のあて具痕であろうか凹凸を残す。器壁は薄く約7mm。焼成はやや弱い。黄褐色を帯び、内部は灰色となる。胎土に石英、橙色粒子を含む。攪乱一括取り上げ。

同図11・12は蓋である。何れも縁辺部の破片で縁を折り曲げによる膨らみを持つ。器面には製



第10図 (PL. 8) 褐釉陶器: 大型壺 (1)、小型壺 (2~6)、茶入れ (7)

黒釉陶器: 天目 (8~10)

タイ産半練土器: 壺 (11・12)、身 (13)

形時のロクロ痕を僅かに残す。前者は推算径9cm。焼きはやや良い。胎土に雲母(?)、赤色粒子を含む。後者は橙白色の器色で内部は灰色。焼きはやや弱い。胎土に多量の赤色及び褐色の鉱物粒を含む。推算径10.6cm。前者はか・きー91グリッド 第3層、後者は攪乱一括取り上げによるものである。

8. タイ産褐釉陶器

壺が1点検出された(第11図1)。具体的な産地は特定できないが、胎土や混入物、把手のつくりからタイ産の可能性が考えられるものである。

頸部下端から胴部にかけての破片と底部片の資料が得られており、素地・胎土・釉薬等の特徴から、両者は同一個体と考えられる。両者で図上復元を試みた。頸部から胴上半部にかけては強く張り出し、肩部を形成する。張り出し部中央には縦に付された把手を残す。外面には胴下半部底部近くまで、内面は頸部下端まで淡い青灰色の釉を掛けるが、内面全体には一度釉を掛けた後拭くった痕が残る。素地はやや粗粒子で灰色。胎土に石英を僅かに含む。胴最大径52.6cm。底径18cm。攪乱一括取り上げ。

9. タイ産無釉炻器

灰色の色調を有する肉厚で大型の瓦質の器が検出された。以下特徴を簡記するが、後述のとおりタイ・スパンブリ産と目される炻器に類似性が認められることから、ここに含めた。

1 壺 (第11図2)

残存部の上下の部位が無く、全体の器形が分からぬが、下部へ強く開くところから肩部付近とみられ、同図1に近い器形が想定される。外面にはやや幅広で浅い沈線を7状巡らし、その沈線間に木の葉状の文様を二段にわたって印刻する。その印文は重複している箇所があり、左から右方向へ施文していたことがわかる。

胎土は灰色、多孔質で瓦に近い焼きとなっている。暗褐色の粒子を多く含んでおり、雲母や石英も僅かにみられる。器壁は厚く2cm。内面にはロクロによる成形痕を残す。

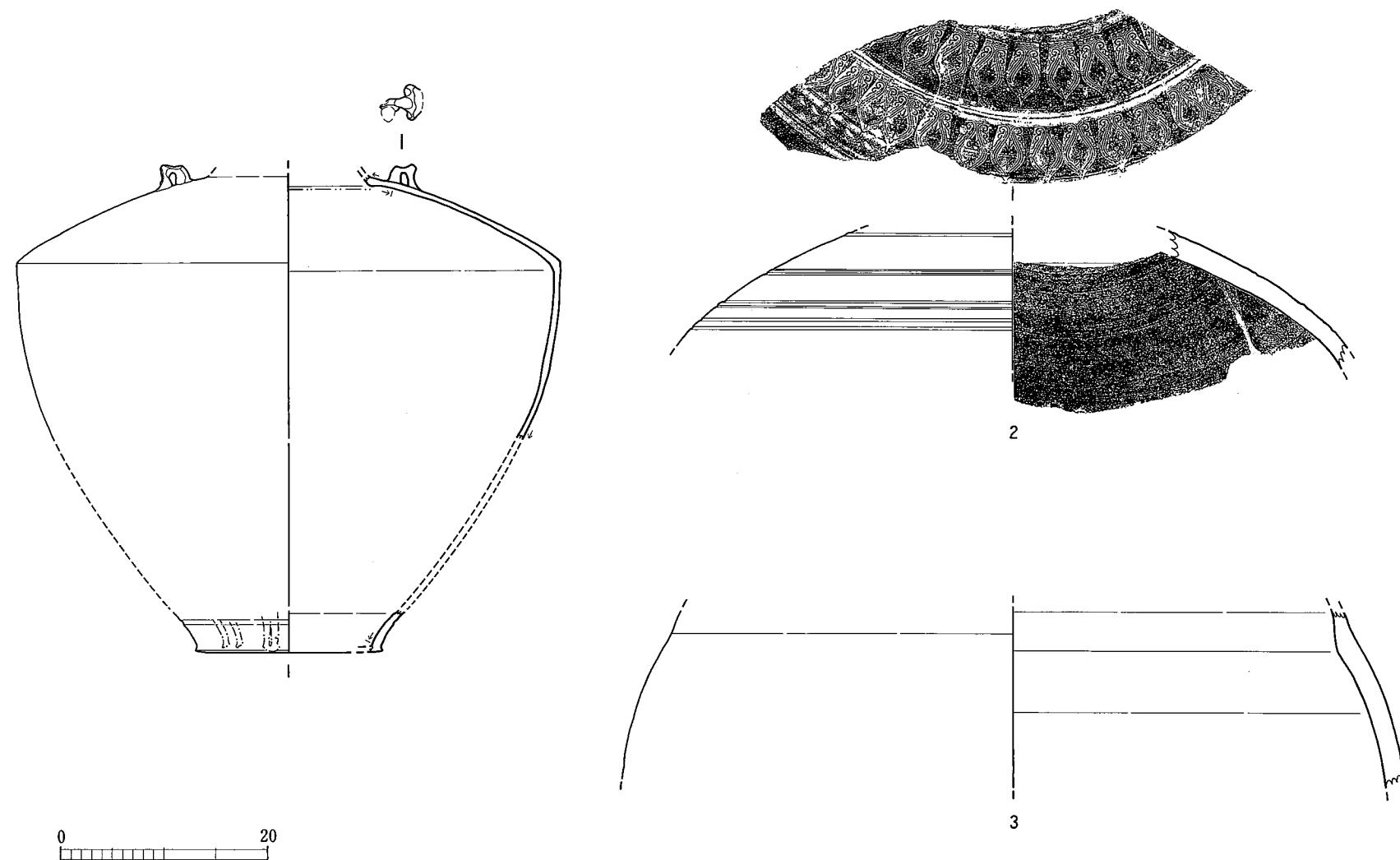
これとよく似た資料が博多においても検出されている(註6)。博多例は報文で見る限り器形・文様・胎土等近似しており、同種のものと思われる。博多例はタイのスパンブリ産のものとしており、本標品も産地を同じくする可能性が高い。くー91グリッド 第3層出土。

2 甕 (同図3)

先述の壺同様の焼成・器色・胎土を有する資料である。やはり残存部の上下の部位が無く、全体の器形が分からぬが、上位へ漸次窄まる内湾器形が想定される。器面に文様は無いが、内面にロクロによる成形痕を残す。現存部での胴の最大径は76cm。器壁は厚いところで2.2cm。先の壺とは器形・文様の有無に違いはあるものの、大凡のサイズ・器壁の厚さ・胎土・焼成・混入物などに共通性が認められ、セットの可能性もある。きー91グリッド 第5層の出土。

10. 備前産陶器

備前産陶器の擂鉢が得られた。1個体分を図示した(第12図2)。推算口径27.2cm。器高9.9cm。底径13.2cm。ベタ底で口縁部外縁が張り出し、口縁部断面は略三角形となる。外面には粘土の継



第11図 (PL. 9) タイ産褐釉陶器：壺 (1)
タイ産無釉炻器：壺 (2)、甕 (3)

ぎ目が僅かに残る。素地は粗粒子で胎土に白色の粒子を多く含む。内面には7本単位とするやや浅い摺目が間隔を空けて施される。か-91グリッド 第5層出土。

11. 産地不明瓦質陶器

産地不明の擂鉢が得られた(第12図3)。暗灰色で一見須恵質を呈する。素地も細かく堅緻である。撹乱一括取り上げ。

12. 金属製品

1 飾り金具 (第13図1・2)

同図1は略方形の標品である。四隅はやや尖り、角と角の間は抉りが入る。中央とその周りにハート形の孔を有する。表面には金(?)メッキを施しているが剥落が著しい。用途については調度品の飾り金具と思われるが、断定できない。く-92グリッド 第4層出土。

同図2は笠状の小品である。中央に約3mmの孔を有し、外縁には刻みを施す。具体的な用途は分からぬが、孔に軸を通して使用したものであろう。装身具の可能性もある。撹乱一括取り上げ。

2 鈴 (同図3)

同図3は鈴の下半部である。撹乱一覧取り上げ。

13. ガラス製品

玉 (第13図4)、

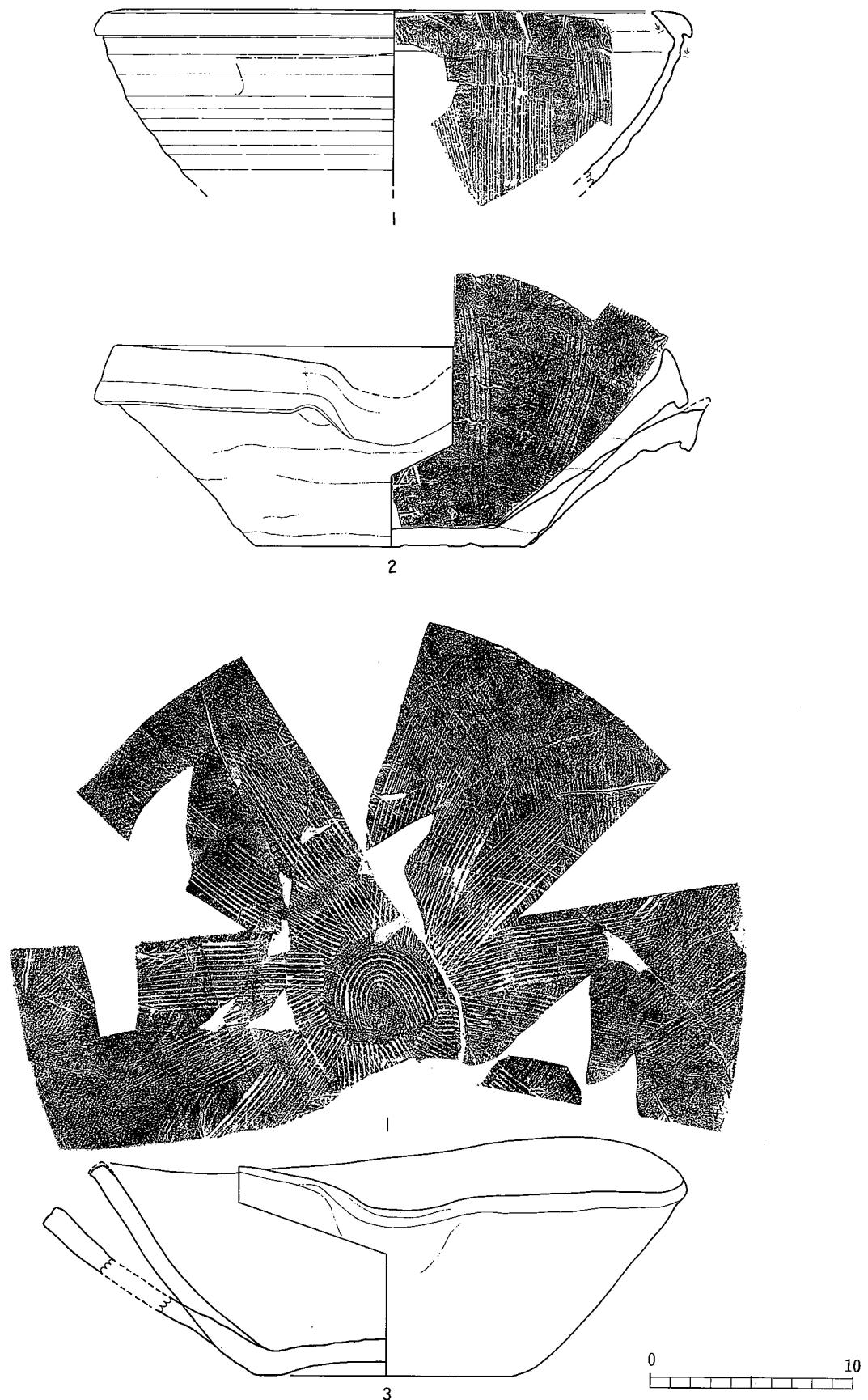
直径6mm、孔径2mm、重さ0.2g。緑青色の小玉である。断面は橢円形を呈し、側部に切り込み状の溝がみられる。き-91グリッド 第4層からの出土。

14. 高麗系瓦

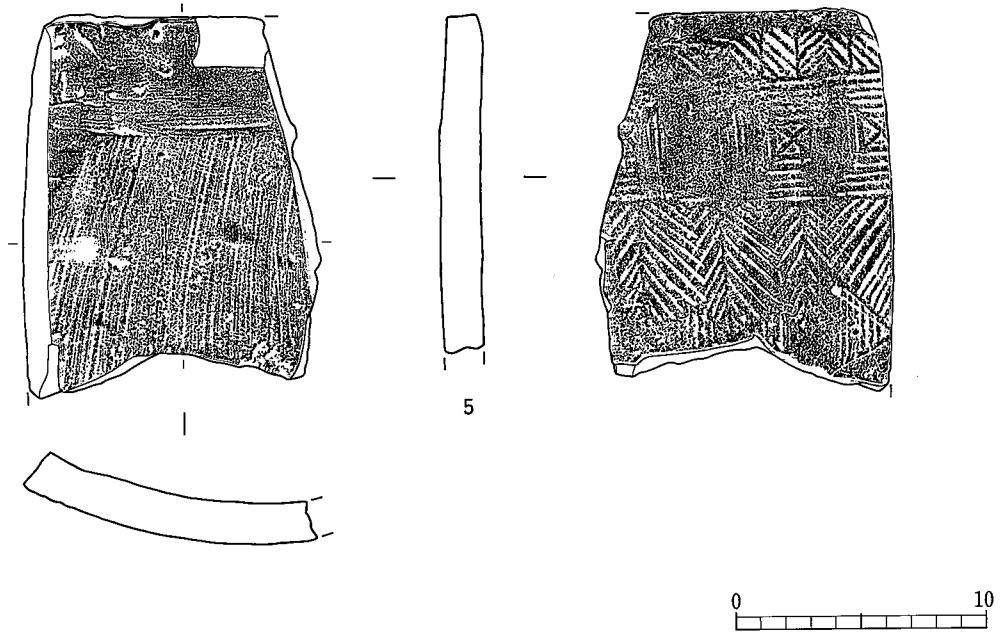
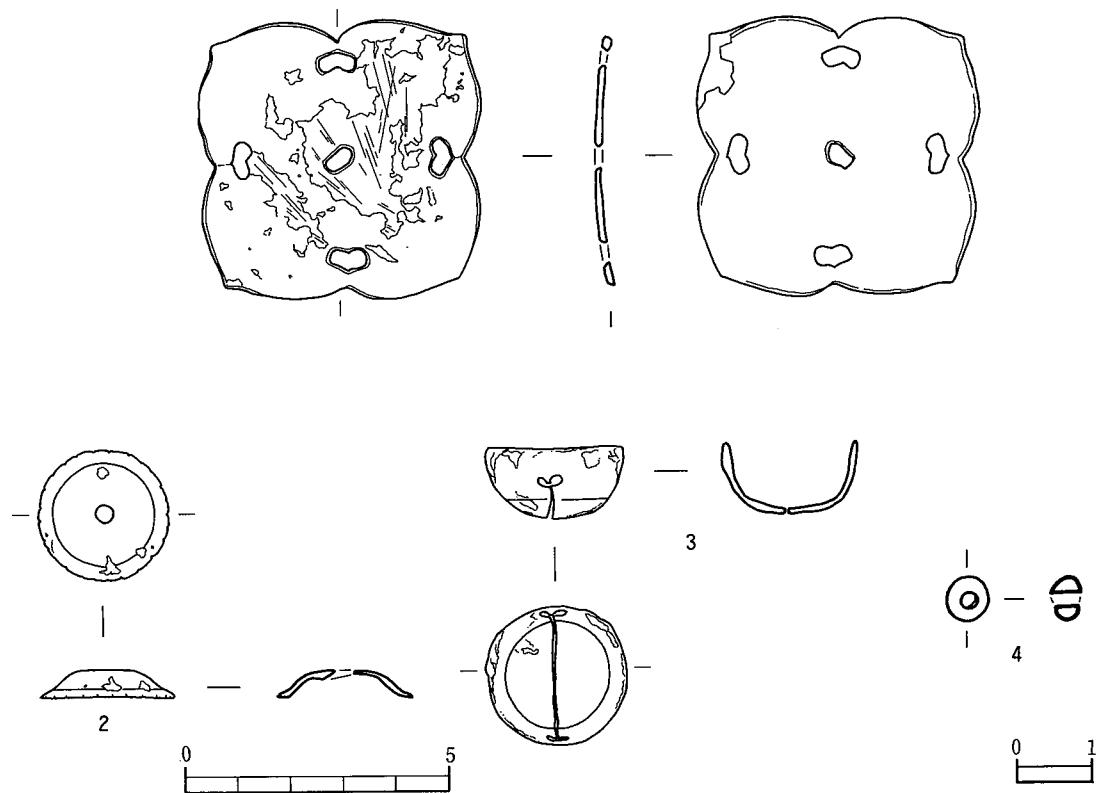
高麗系古瓦が得られている(第13図5)。平瓦の破片である。凸面には綾杉文と横位文および方形の区画文様が施される。凹面はほぼ長軸沿った擦痕と横位の擦痕をナデ消した空白部が残る。器色は淡灰色を呈する。厚さ1.6cm。胎土に僅かに雲母(?)を含む。試掘杭より出土。

15. 銭貨

破片を含めて37点得られた。銘入り銭と無文銭とがあり、前者は11種35枚ある。この内20点を図示した(第14・15図)。五銖銭から永樂通寶まで、その年代幅は大きいが、北宋～明代にかけての標品が多い。また、種別でみると洪武通寶が10枚と最も多い。第5表に観察一覧を掲げる。



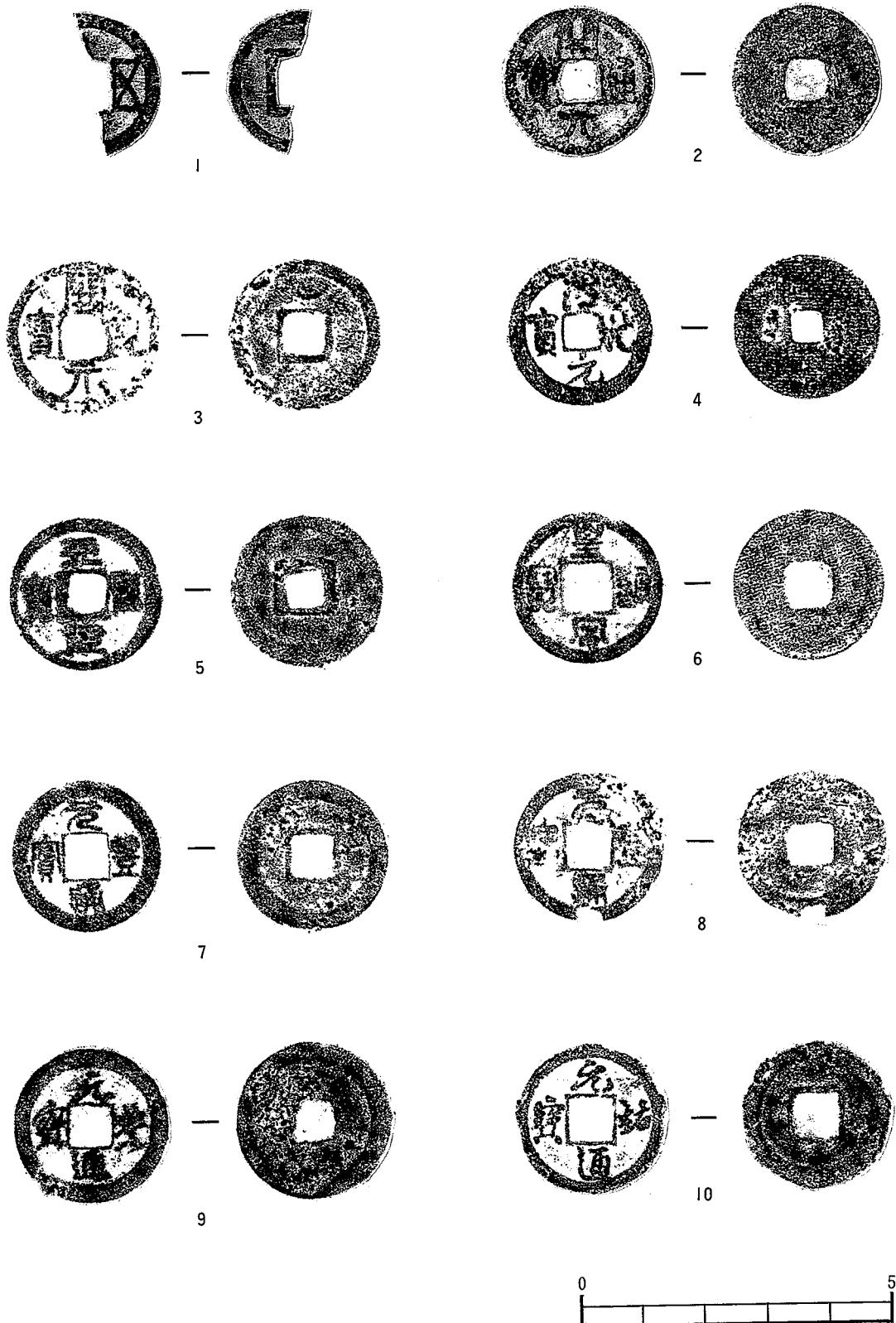
第12図 (PL.10) 褐釉陶器：擂鉢 (1)
備前産陶器：擂鉢 (2)
産地不明瓦質陶器：擂鉢 (3)



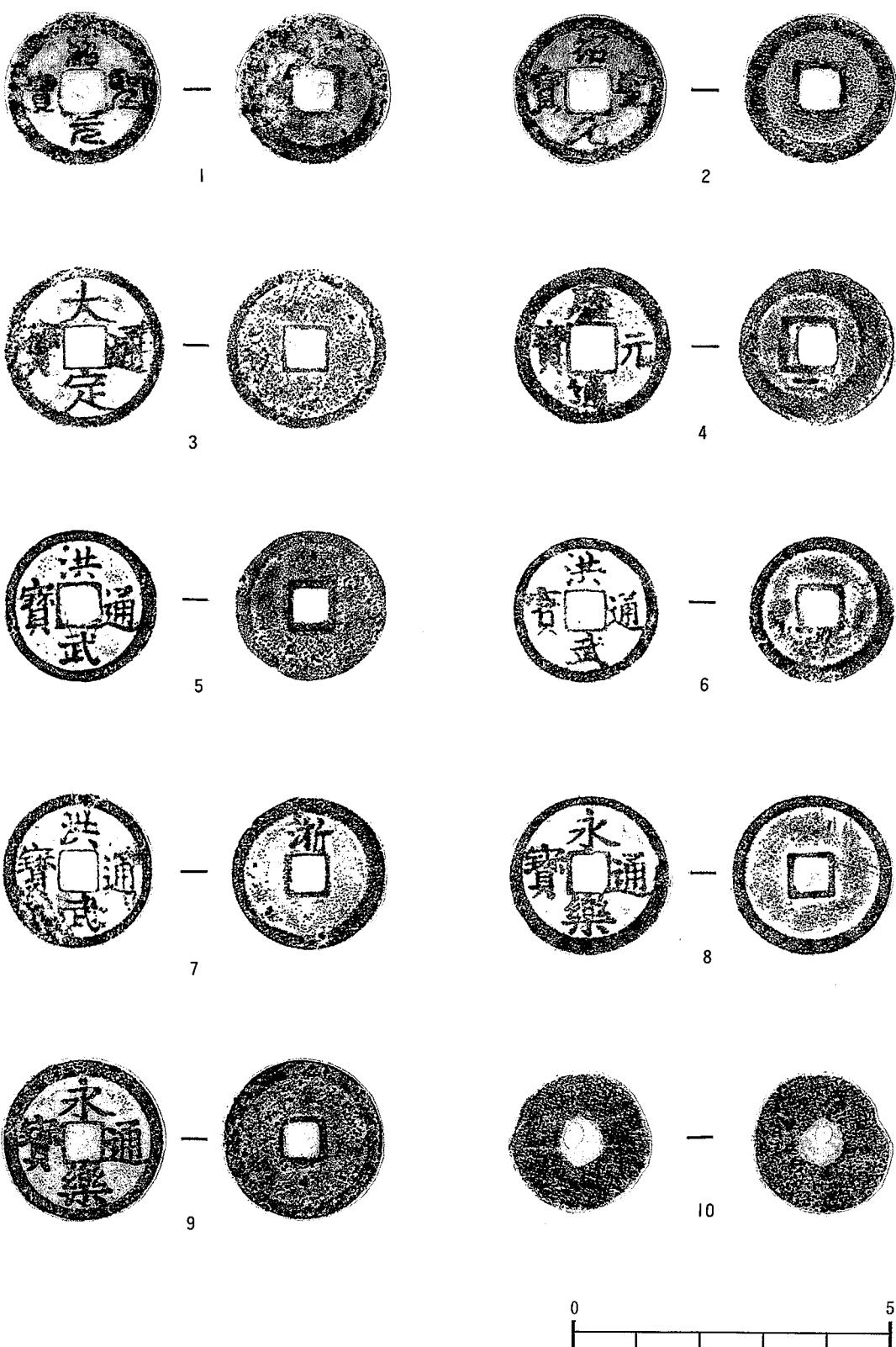
第13図 (PL.11) 金属製品：飾り金具 (1)、鈴 (2・3)
ガラス製品：玉 (4)
瓦：高麗系瓦 (5)

第5表 錢貨観察一覧

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層序	錢貨名	国名	初鑄年 (西暦)	錢径 (mm) A	錢径 (mm) B	内径 (mm) C	内径 (mm) D	錢 厚 (mm)	量目 (g)
第14図 1 PL.12の1	く-91 第5層	五銖			—	—	—	—	0.95~1.20	0.9
〃 2	く-92 第4層	開元通寶	唐	621	21.00	20.95	18.00	17.70	0.70~1.00	2.2
〃 3	く-91 第5層	〃	〃	〃	—	—	—	—	1.00~1.20	2.9
〃 4	〃	?		1023	21.00	21.00	15.80	15.90	0.95~1.10	2.9
〃 5	攬乱一括 取り上げ	天聖元寶	北宋	〃	21.95	22.05	17.90	17.80	0.85~1.60	4.6
〃 6	く-92 第3表	皇宋通寶	〃	1038	22.00	22.00	18.05	18.05	1.10~1.20	3.3
〃 7	く-91 第5層	元豐通寶	〃	1078	22.00	21.80	16.50	15.95	1.30~1.35	3.5
〃 8	く-92 第4層	〃	〃	〃	—	21.70	17.20	16.90	1.15~1.35	3.3
〃 9	〃	〃	〃	〃	22.30	22.20	16.30	16.80	1.30~1.40	4.2
〃 10	〃	元祐通寶	〃	1086	21.50	21.50	17.10	17.30	1.25~1.30	3.0
第15図 1 PL.13の1	〃	紹聖元寶	〃	1094	21.40	21.20	16.50	16.60	1.40~1.30	3.0
〃 2	く-91 第5層	〃	〃	〃	21.30	21.20	17.00	17.20	1.40~1.50	3.7
〃 3	く-92 第4層	大定通寶	金	1174	23.10	22.95	19.50	17.95	1.40~1.50	3.8
〃 4	〃	慶元通寶	南宋	1195	22.30	22.20	17.80	17.20	1.25~1.85	5.0
〃 5	〃	洪武通寶	明	1368	20.95	21.20	17.90	17.60	1.10~1.35	3.1
〃 6	く-91 第5層	〃	〃	〃	20.70	20.50	16.60	16.95	1.45~1.75	4.0
〃 7	〃	〃	〃	〃	21.90	21.80	18.00	18.00	1.20~1.55	3.2
〃 8	〃	永樂通寶	〃	1411	22.60	22.80	18.95	18.95	1.35~1.50	3.8
〃 9	攬乱一括 取り上げ	〃	〃	〃	22.70	22.30	18.60	18.70	1.25~1.50	4.0
〃 10	く-92 第4層	無文	—	—	20.00	18.00	—	—	0.50~0.80	1.2



第14図 (PL.12) 錢貨



第15図 (PL.13) 錢貨

第7章 まとめ

以上、発掘調査の成果を述べてきた。ここでは今一度触れまとめとしたい。

まず、今回の調査で先史時代に属する生活の痕跡が確認されたことは注目される。第2章でも触れたとおり、後方崖中腹の洞穴より沖縄貝塚時代後期の遺跡が確認されているが、当時の調査から埋葬遺跡であることが判明している。今回本遺跡から出土した遺物をみてみると先の洞穴遺跡資料との若干の差異はあるものの、概ね同時期とみられる。とすれば、崖上が生活の場で、崖下を葬地とする当時の空間の使い分けのわかる事例のひとつといえよう。住居址等遺構の検出されなかった現時点では即断はできないが、ひとつの可能性として提示しておきたい。

他方時期は降って、概ね14～16世紀に所属する、比較的多くの移入陶磁器の出土は目を惹いた。この頃は沖縄の海外交流の盛期ともいえる時期で、当該期の輸入陶磁器の出土するグスク遺跡のそれと概ね合致する。産地別にみると出土量は中国産が最も多く他を圧倒する。在地産土器の出土もおもいの外多く、ついでタイが続き、備前産擂鉢に代表される九州本土産の器物は稀少であった。

中国産陶磁器の内訳は青磁では碗・皿・盤が、白磁では碗・杯が主体を占めている。量的には多くないが黒釉陶器や褐釉陶器が続く。黒釉陶器いわゆる天目茶碗や褐釉茶入れの検出は当時の喫茶との関連で興味深い。

タイ産資料のなかで県内初の出土とみられる無釉炻器の出土は特筆される。壺と甕がそれで、特に前者は博多での出土例にきわめて近い特徴を持っており、おそらく同系統のものであろう。博多出土例はスパンブリ産と特定されており、具体的な産地の判る資料の出土は意義深い。最近、今帰仁グスク出土の象嵌陶質土器がタイのハリブンチャイ窯産であることが金武正紀氏によって確認されており(註4)、今後彼の地と沖縄とのより具体的な交流を示す資料の増加が期待される。

文献からみたハナグスクの来歴については第2章で既述したところであるが、不明な点も多いが、文字にみると初見は、古くは察度王19(1368)年に頼重上人により熊野三所権現を勧請、海上山護国寺を建立したとはやく、宗教施設として出発したという。出土遺物からみた時期はおおよそ14世紀に始まることがわかつており、先の出土資料は創建年代に合致する。

ただ、これら文献史料と実際に出土した資料とのつきあわせてみると、護国寺創建当時関わった頼重や日秀等、関連が考えられる薩摩など、九州・本土との関わりについては希薄な印象を受け、むしろ中国東南アジアとの関係が示唆される。ちなみに県内において寺社仏閣に関する遺跡の発掘調査報告書として崇元寺がある(註7)。

三山統一前後の時期、交易の窓口として発展しつつあったうきしまの、信仰の場としての色彩も帶びたひとつの拠点として成立したハナグスクの姿の一端が窺える。

註

1. 嘉手納宗徳『球陽をみるための読史地図』
2. 仲原善忠・外間守善編『校本おもろさうし』 角川書店 1965年
3. 高宮広衛「那覇市の考古資料」『那覇市史』資料篇第1巻1 那覇市 1968年
4. 金武正紀・宮里末廣他『今帰仁城跡発掘調査報告I』 今帰仁村文化財調査報告第9集 今帰

- 仁村教育委員会 1983年
5. 島弘他『識名シーマ御嶽遺跡』那覇市文化財調査報告書第34集 那覇市教育委員会 1997年
 6. 森本朝子「博多出土のタイ陶磁について—アマラ・スリサッチャ氏に聞く—」『法哈噠』第1号 博多研究会 1992年
 7. 上原靜他『崇元寺跡—範囲確認調査概報—』那覇市文化財調査報告書第9集 那覇市教育委員会 1983年

参考文献

- 嵩元政秀「沖縄県内出土の錢貨について」『南島考古』創刊号 沖縄考古学会 1970年
- 島尻勝太郎「日秀上人の事績」『沖縄の宗教と民俗』窪徳忠先生沖縄調査二十周年記念論文集 第一書房 1988年
- 高宮広衛「唐・大和時代の沖縄—開元通宝の示唆するもの—」『月刊文化財発掘出土情報』No.6 ジャパン通信社 1995年
- 琉球新報1967年5月28日付け朝刊「中国の古錢掘り出す」と題する見出しの記事
- 『角川日本地名大辞典』47沖縄県 角川書店 1986年
- 東恩納寛惇『南島風土記』沖縄郷土文化研究会 1950年
- 尾崎直人『タイ・カンボジアの陶器』福岡市美術館 1996年
- 永井久美男編『中世の出土錢—出土錢の調査と分類—』兵庫埋蔵錢調査会 1994年
- 平敷令治「神仏の信仰」『那覇市史』第2巻7 那覇市 1979年
- 金城亀信他『首里城跡—京の内跡調査報告書(1)』沖縄県教育委員会 1998年
- 宮里朝光「琉球人の思想と宗教」『沖縄の宗教と民俗』窪徳忠先生沖縄調査二十周年記念論文集 第一書房 1988年

図 版

PL. 1 発掘調査の状況

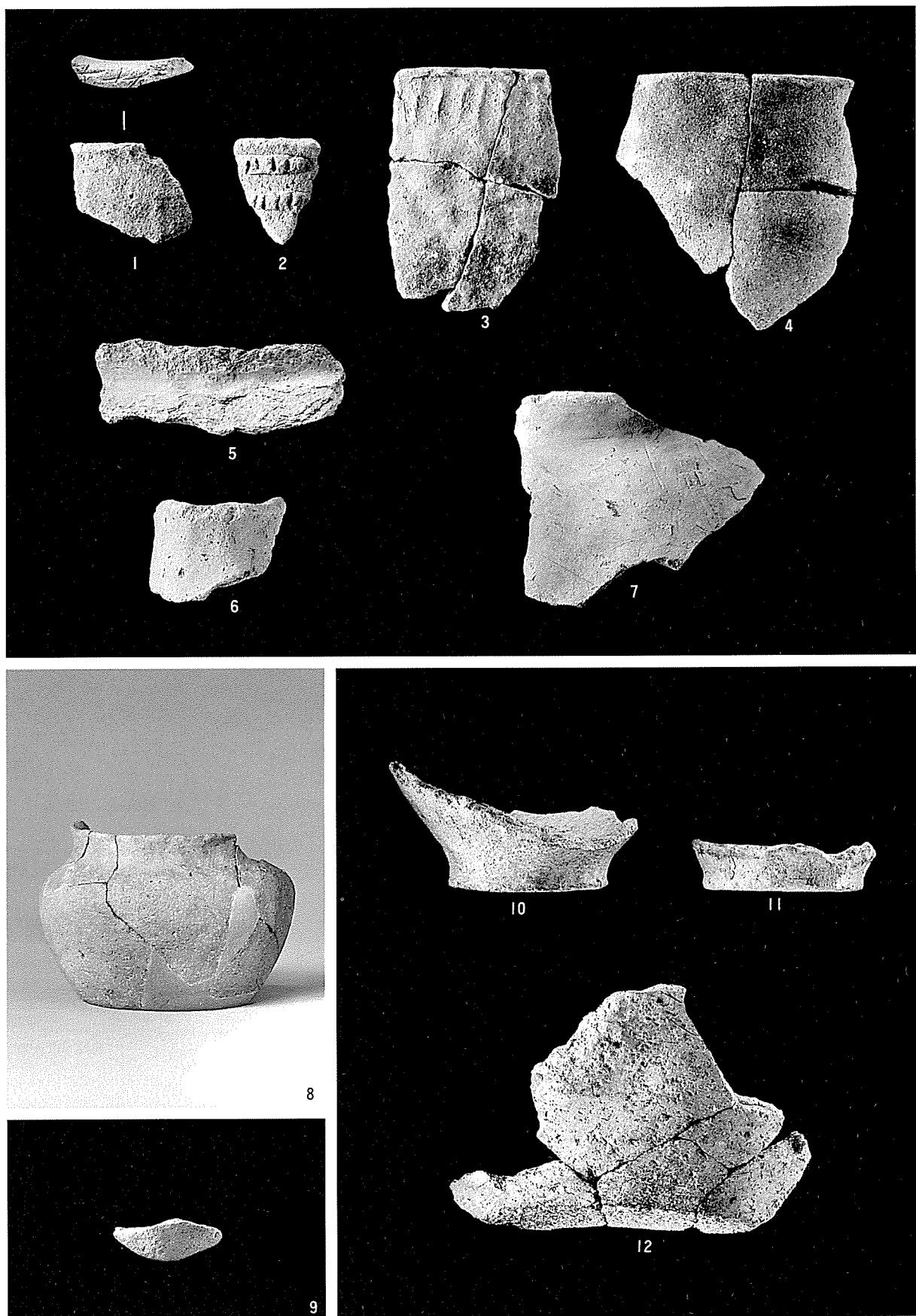


PL. 2 発掘調査の状況

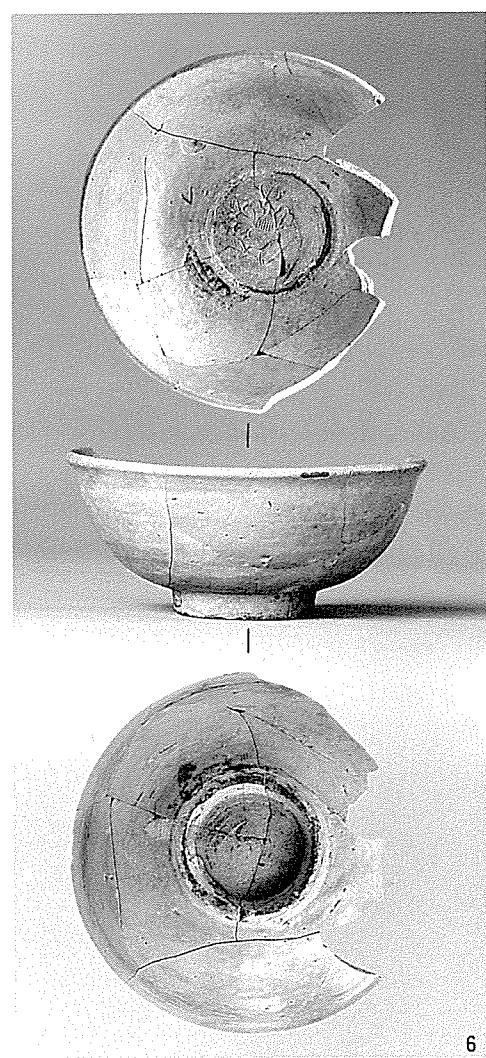
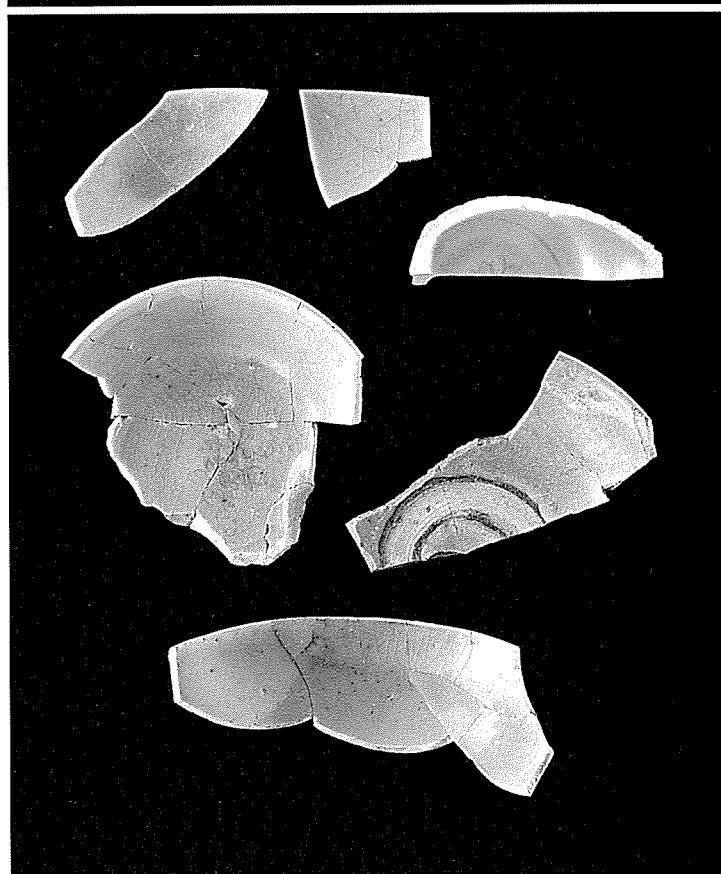
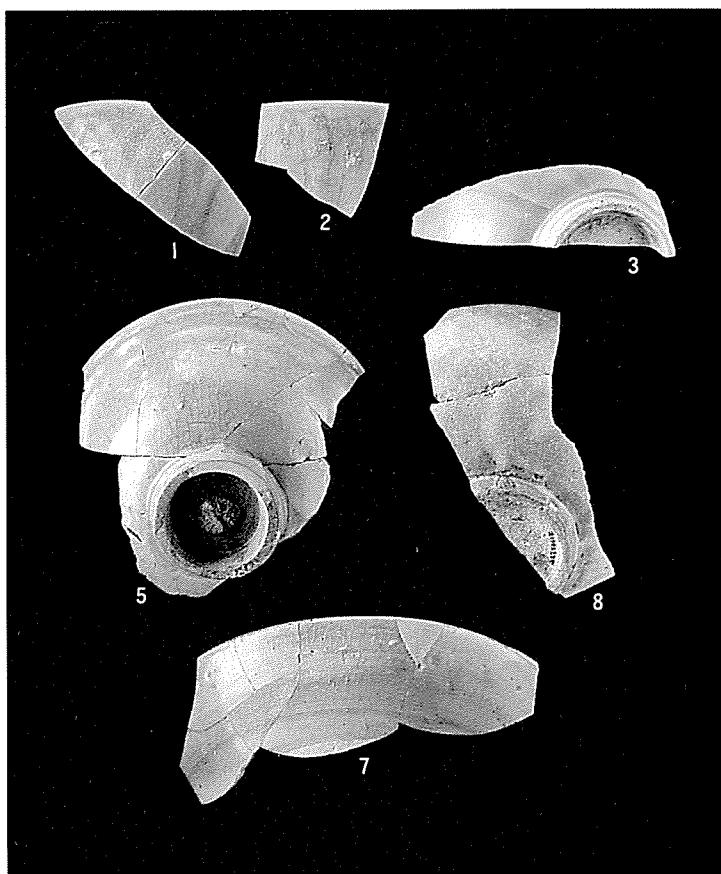


PL. 3 発掘調査の状況

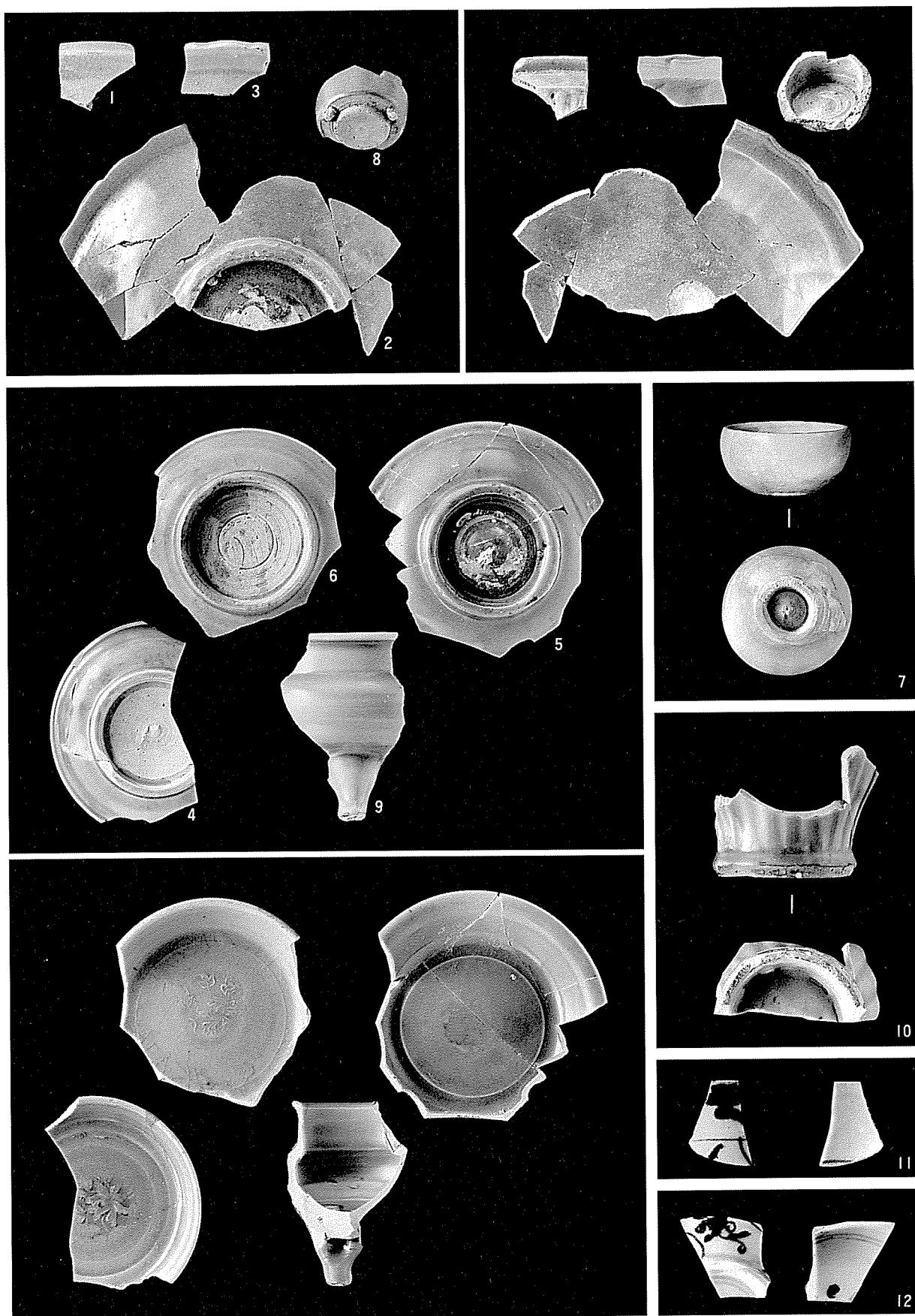




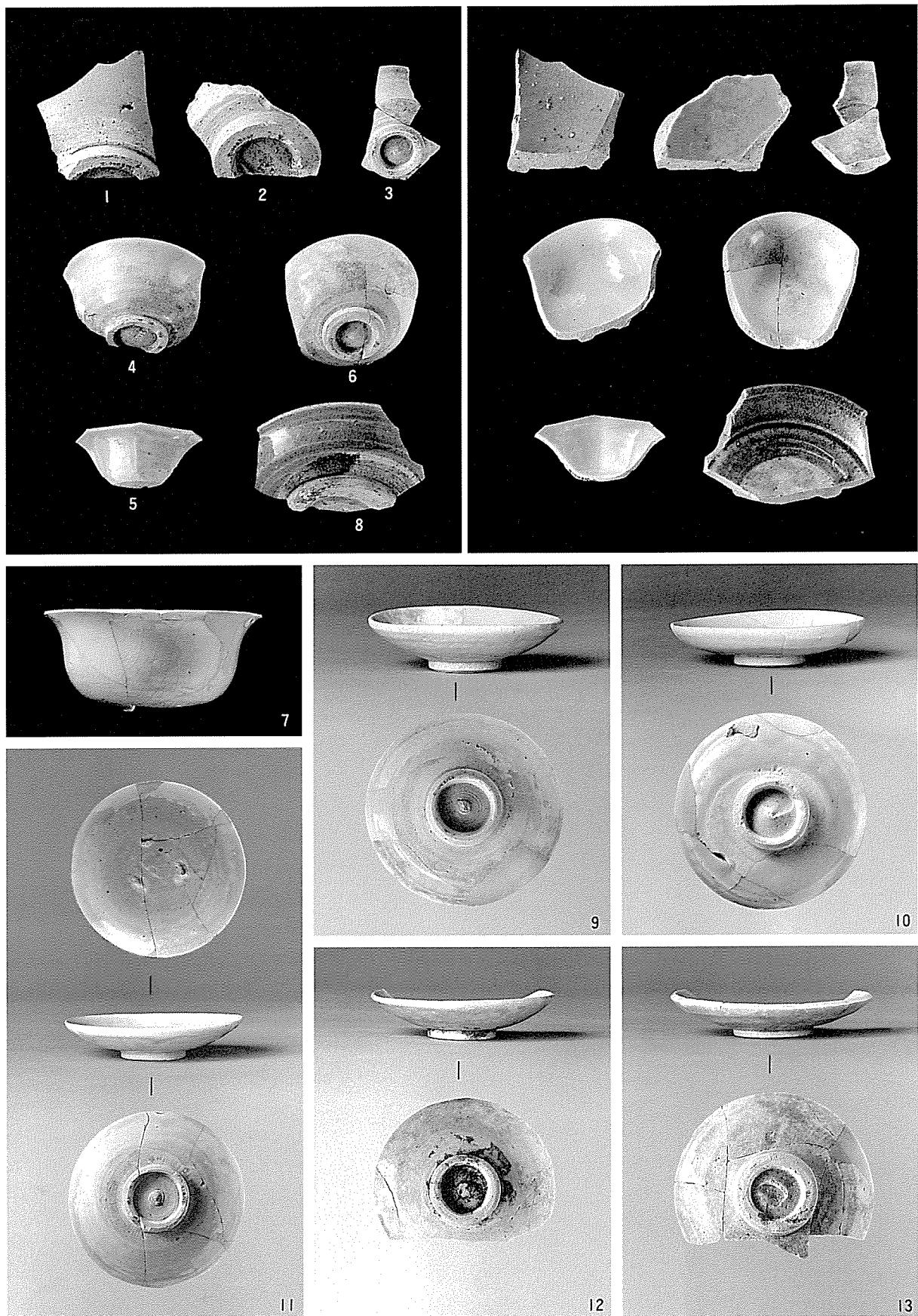
PL. 4 (第6図) 土器：鉢形(1～4)、甕形(5)、壺形(6・7)、杯形(8)、底部(9～12)



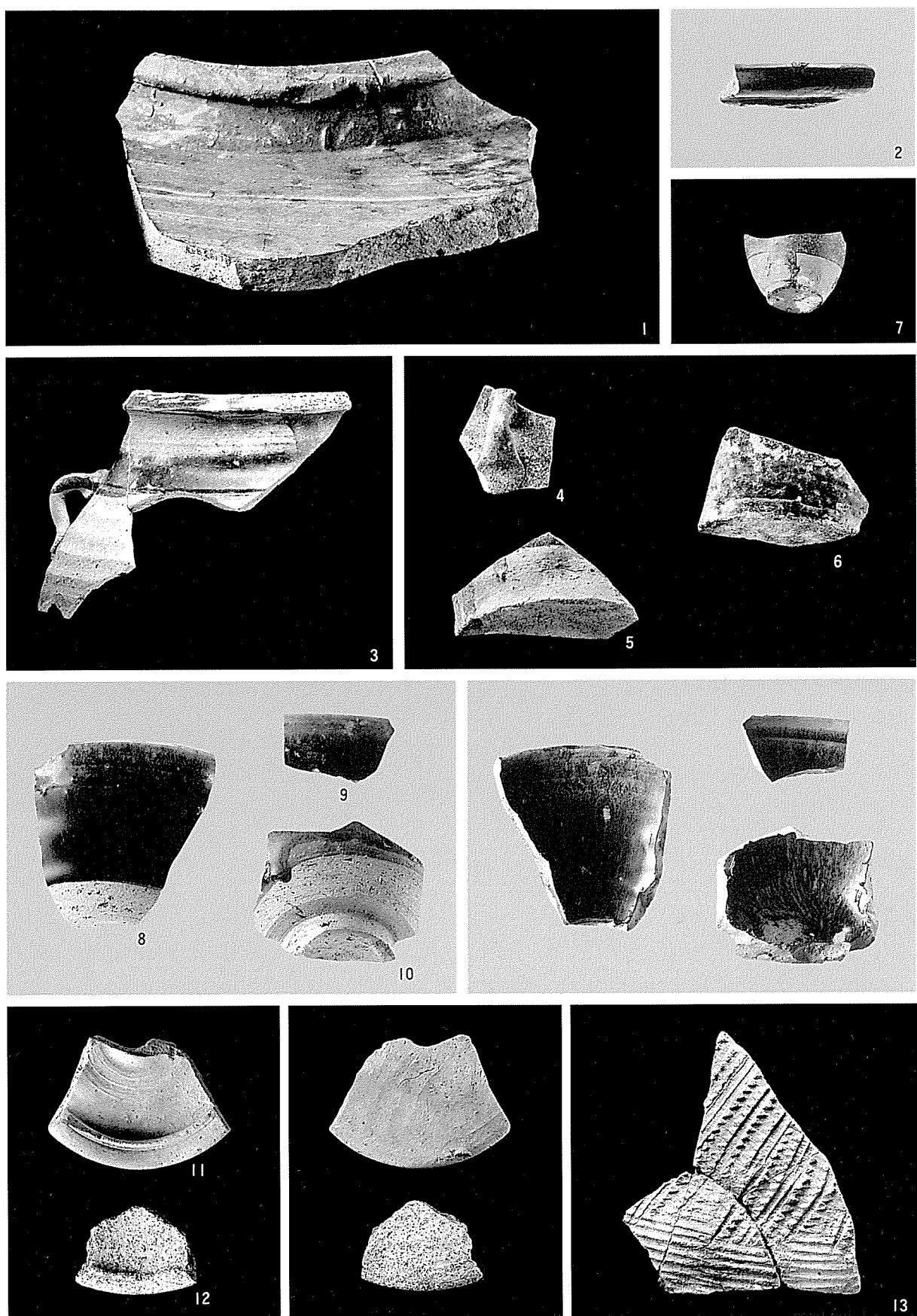
PL. 5 (第 7 図) 青磁：碗



PL. 6 (第8図) 青磁:盤(1~3)・皿(4~6)・杯(7)・茶入れ(8)・香炉(9)・瓶(10)
青花:碗(11・12)



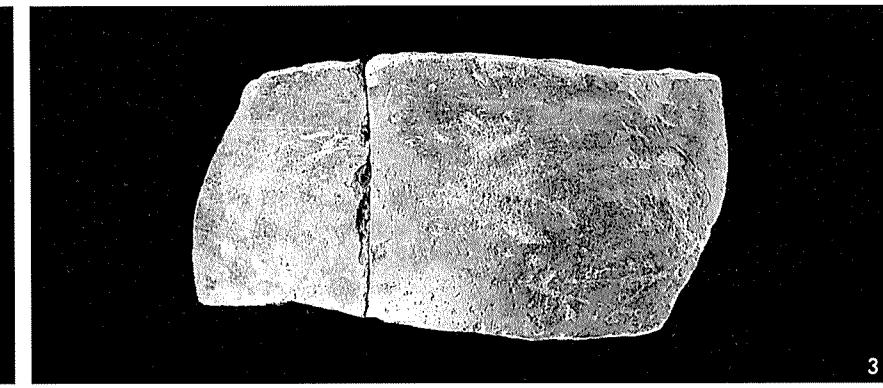
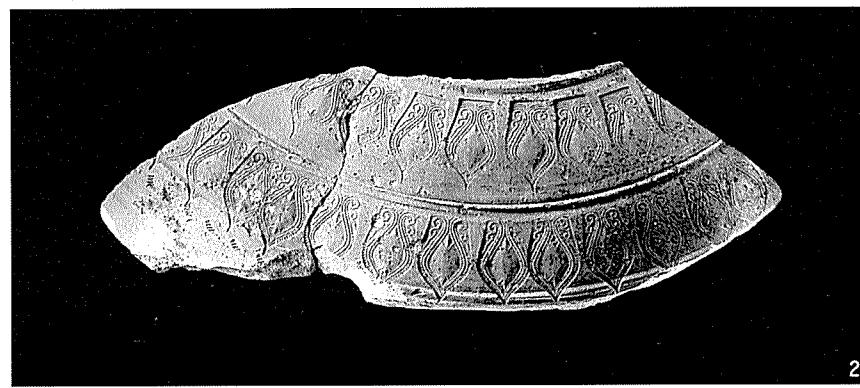
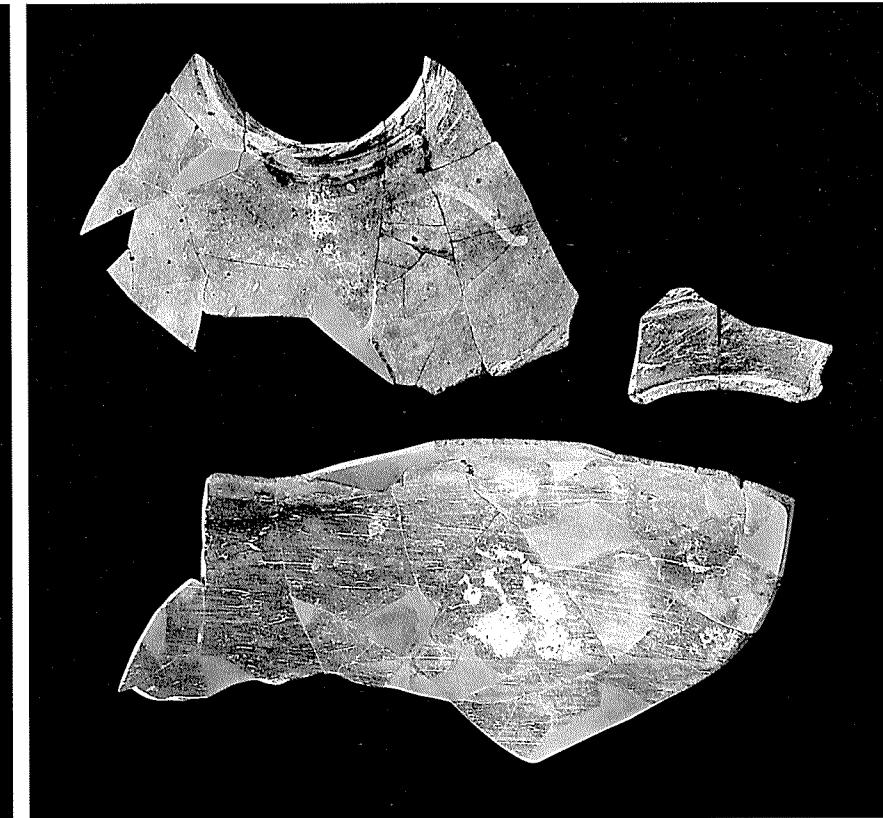
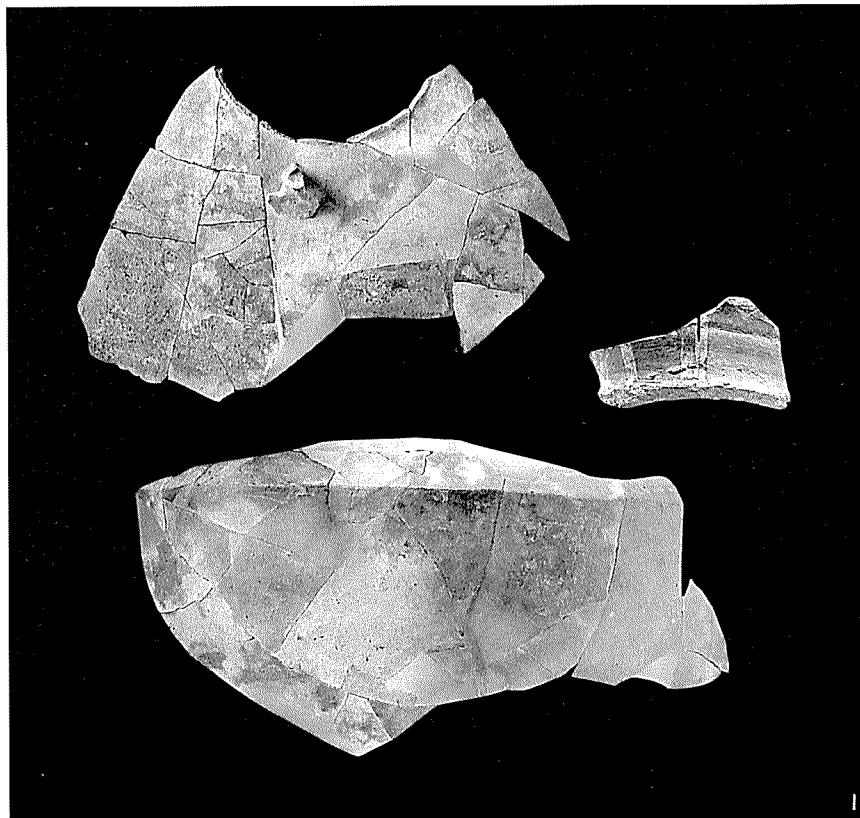
PL. 7 (第9図) 白磁: 碗 (1・2)・杯 (3~7)・皿 (8~13)



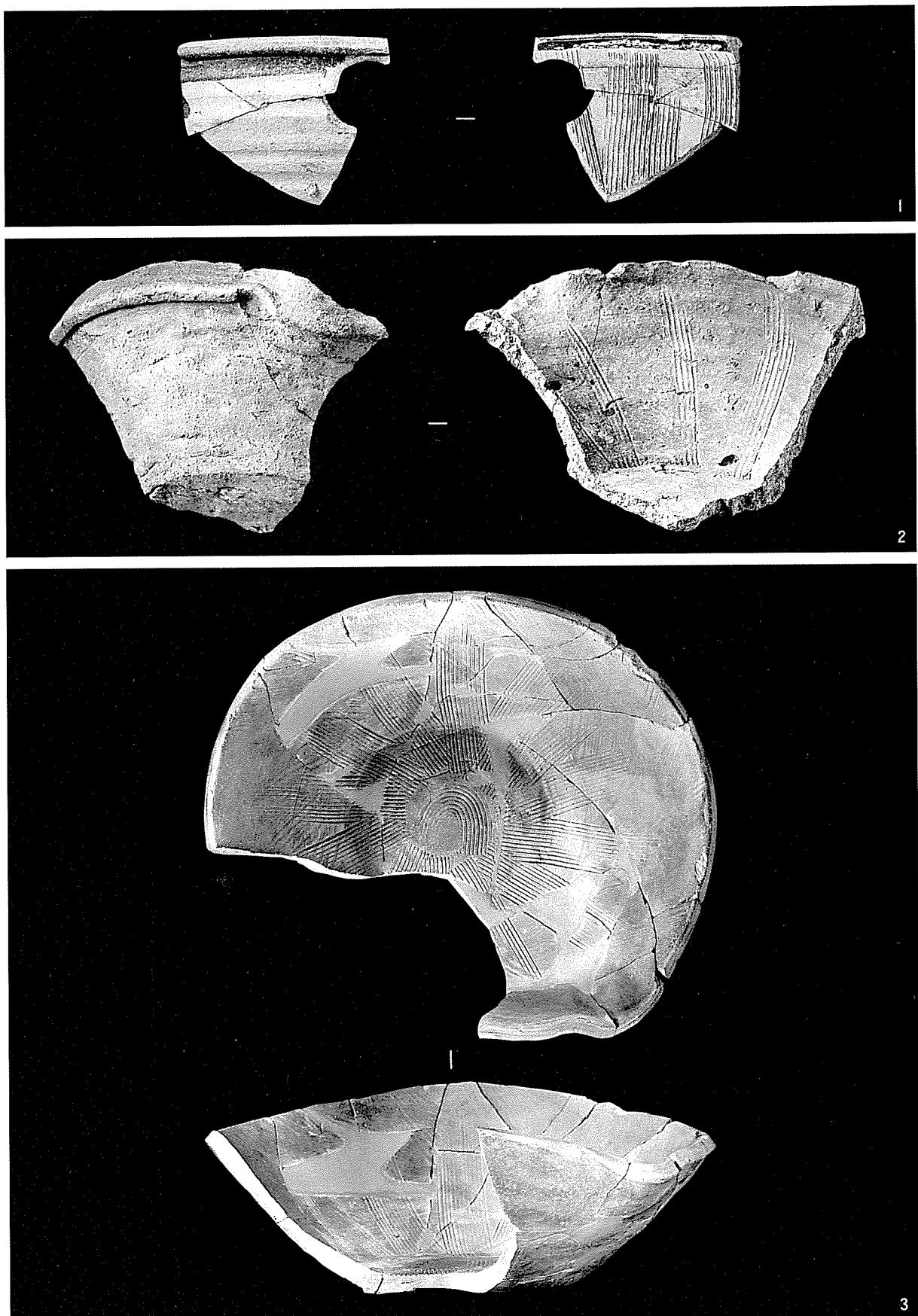
PL. 8 (第10図) 褐釉陶器:大型壺(1)、小型壺(2~6)、茶入れ(7)

黒釉陶器:天目(8~10)

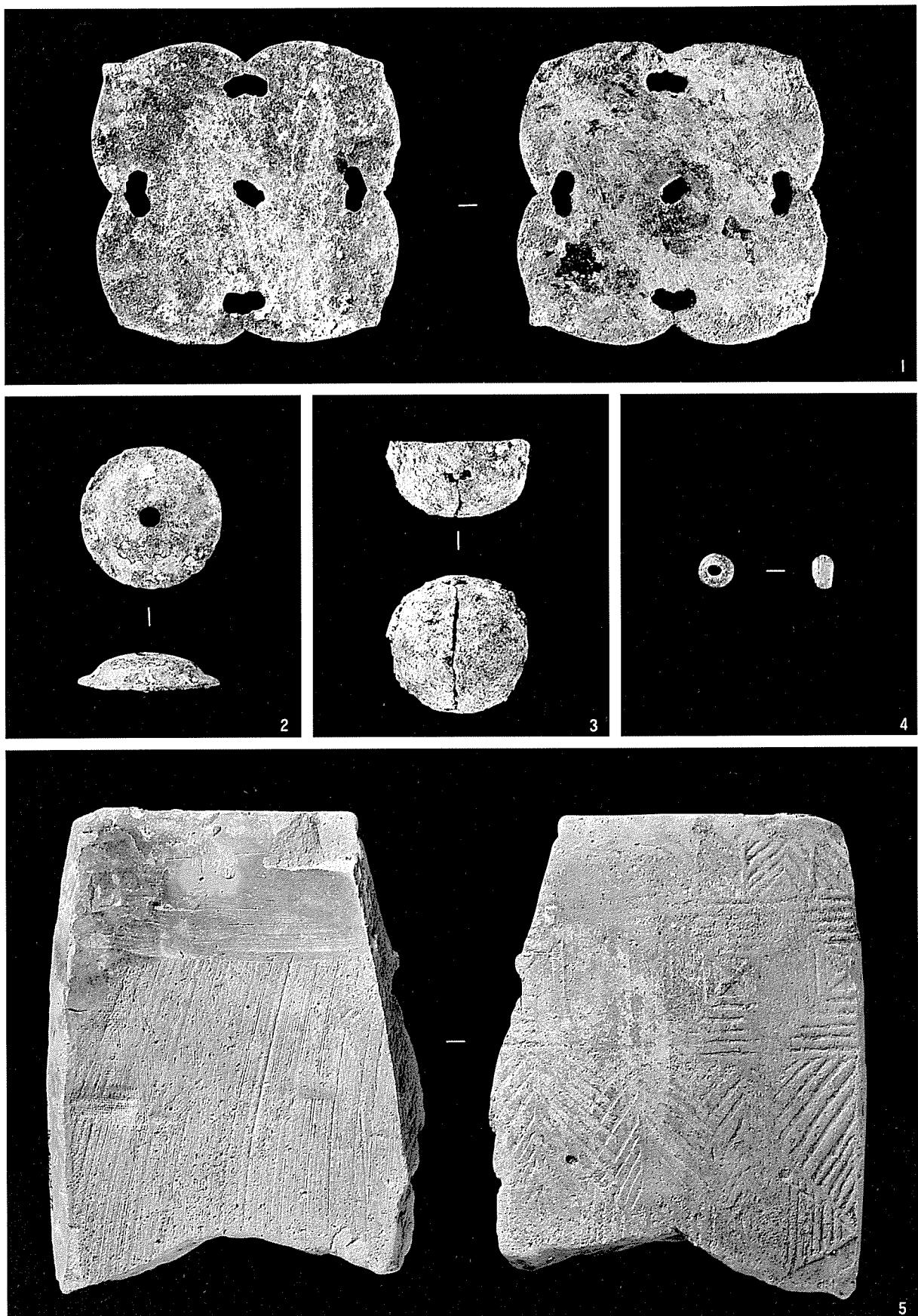
タイ産半練土器:蓋(11・12)、身(13)



PL. 9 (第11図) タイ産褐釉陶器：壺 (1)
タイ産無釉炻器：壺 (2)、甕 (3)



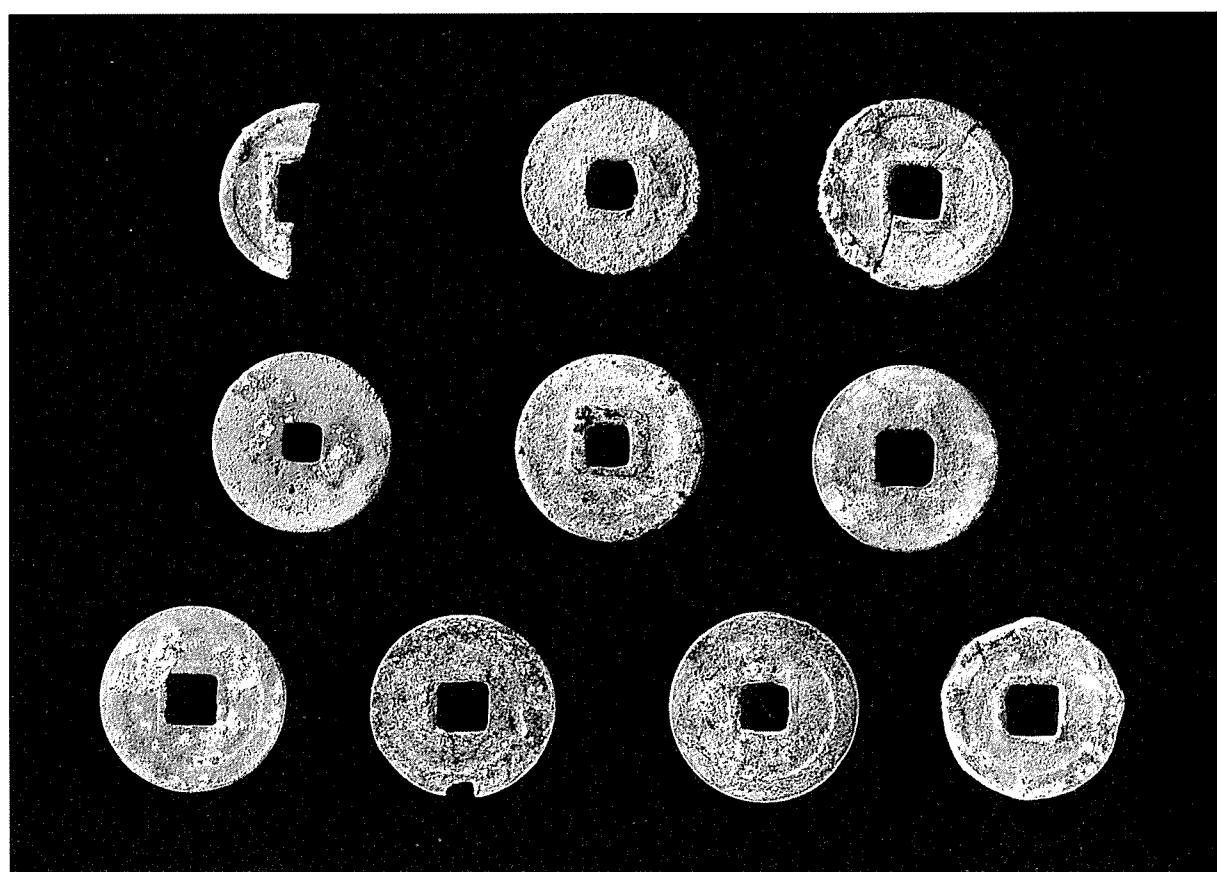
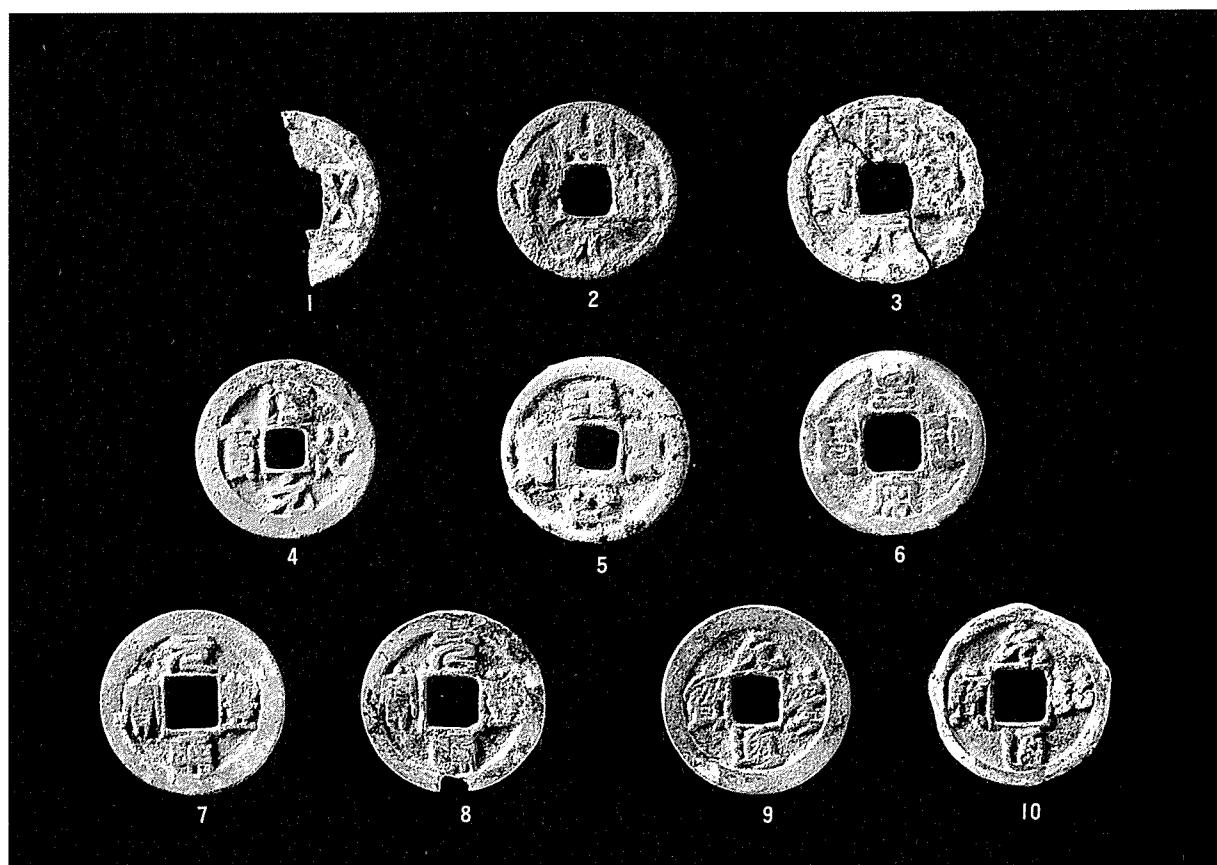
PL.10 (第12図) 褐釉陶器：擂鉢（1）
備前産陶器：擂鉢（2）
産地不明瓦質陶器：擂鉢（3）



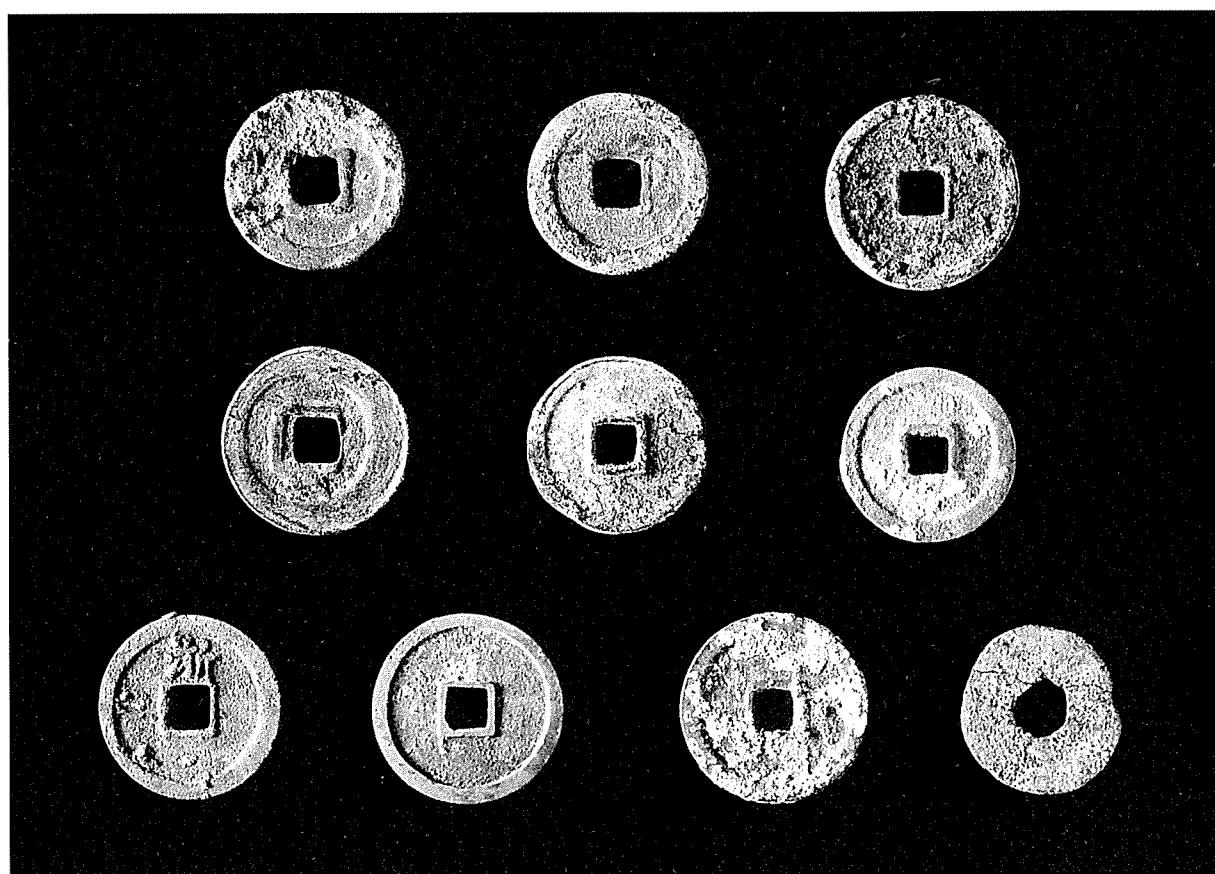
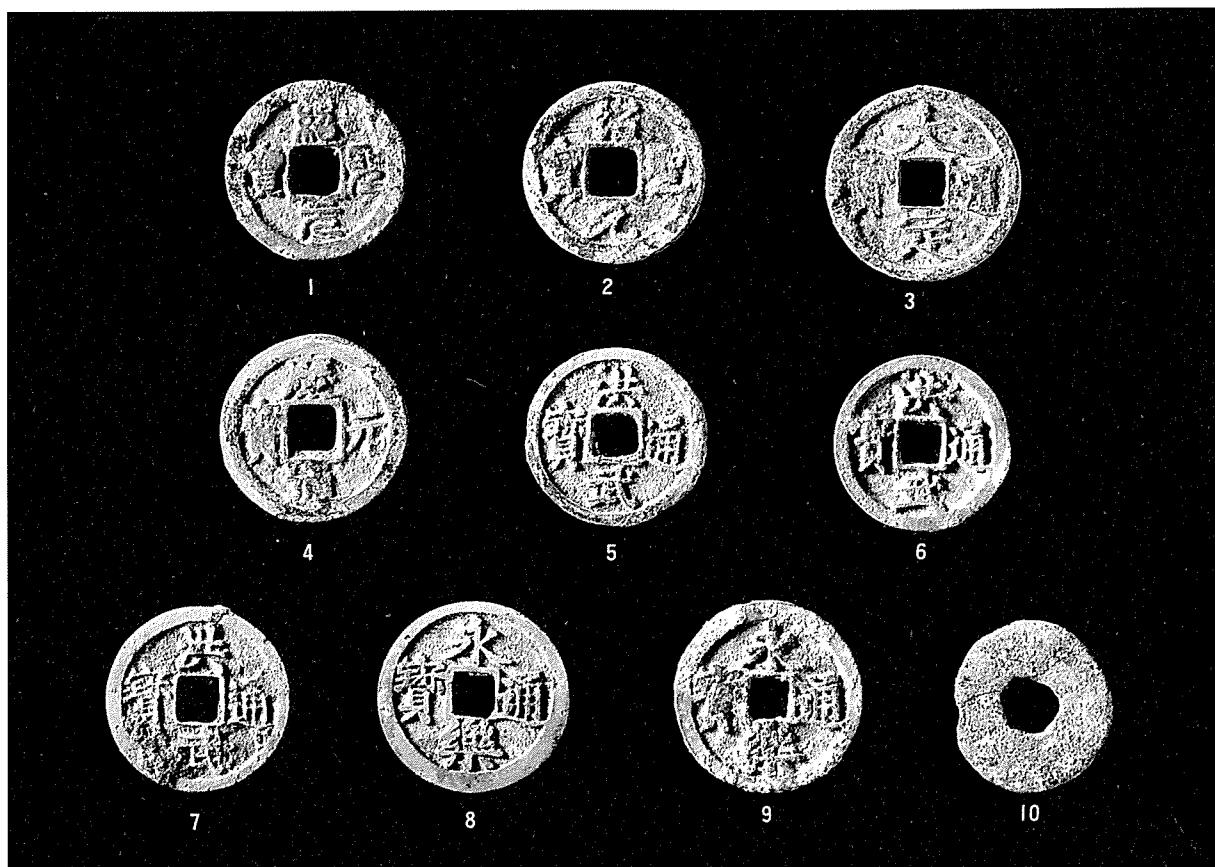
PL.11 (第13図) 金属製品：飾り金具（1）、鈴（2・3）

ガラス製品：玉（4）

瓦：高麗系瓦（5）



PL.12 (第14図) 錢貨



PL.13 (第15図) 錢貨

那覇市文化財調査報告書第41集

ハナグスク

——波之宮御復興造営事業に係る埋蔵文化財緊急発掘調査——

発 行 1999年3月30日

那覇市教育委員会

〒900-8553 沖縄県那覇市樋川2-8-8

編 集 那覇市教育委員会文化財課

☎ 098-853-5775

印 刷 文進印刷株式会社

〒901-0305 沖縄県糸満市西崎町5丁目10-14

☎ 098-994-5777
